

Title	日本の文庫：運営の現状と運営者の意識
Sub Title	Bunko in Japan : studying the trends of Bunko operation and the attitude of Bunko operators
Author	汐崎, 順子(Shiozaki, Junko)
Publisher	三田図書館・情報学会
Publication year	2013
Jtitle	Library and information science No.70 (2013.) ,p.25- 54
JaLC DOI	
Abstract	<p>【目的】 文庫は日本独自の私的な児童図書館的活動であり,第二次世界大戦後,急速に拡がり全国各地に定着した。本稿はこの文庫の運営の現状,および運営者の意識を明らかにすることを目的としている。</p> <p>【方法】 2010年5月に全国の文庫を対象に質問紙調査を実施し,528件の有効な回答を得た。この結果を分析して文庫の運営の現状と運営者の意識を量的・質的に明らかにした。</p> <p>【結果】 文庫は減少の傾向にあり,運営者の高年齢化と少人数化が進んでいる。これは家庭文庫を中心とした施設と蔵書の充実と関連している。また調査結果の検証から,文庫の活動を行う場所,文庫の本,運営の精神が必ずしも一体としてではなく,各要素が部分的に単独で引き継がれるのも文庫継続の一つの形であることが分かった。とりわけ本は継続を支えるための重要な要素であった。加えて同一の運営者が場所を変えて文庫を継続させている様子も明らかになった。文庫を始めた動機と続けている理由を尋ねる設問への回答からは,「子どもの本」,「子ども」,および「本を手渡すこと」が好きだ,大切だと思う気持ち,継続した活動を動機づけている不変の意識であることが分かった。さらに運営者の意識として16の要素を見出し,「子どもとのつながり」,「自分の生き方」,「他者とのつながり」,「文庫の役割の発見,運営者としての自覚」の4つの概念に分類した。</p> <p>Purpose: Bunko is a private activity providing library services for children, which is unique to Japan. After the World War II, the activity spread rapidly all over the country. The purpose of this study is to survey current situation of the Bunko activity in Japan and to examine how its operators (i.e., persons responsible for it) feel the activity.</p> <p>Methods: In May 2010, questionnaires were sent to the operators of Bunko activities and valid 528 responses were obtained finally. The responses were analyzed quantitatively and qualitatively.</p> <p>Results: Findings show that the number of organizations working as Bunko has decreased. The operators in the organizations are aging and their number is decreasing, which affects quality of the activity in terms of its facility and book collection, remarkably in the Bunko operated at private homes. Also, all of three core elements for the Bunko activity such as 'place', 'books' and 'mission' are not always succeeded when its operator was exchanged, and only one or two of them tend to be kept continuously, which is a feature of Bunko activity. In particular, books are an important element for keeping the activity. Sometimes a person who suspended the activity at one place continues it at another location. As for the motivation and reasons for engaging in Bunko activity, it turned out that their belief in the value of 'children's books', children' and 'an act of handing books to children' were main incentive to sustain Bunko activity. In addition, 16 characteristics were found from the Bunko operators' attitudes. These characteristics were categorized into four concepts: relationship with children, one's own lifestyle, relationship with</p>

	others, and recognition of the role of Bunko activity and that of the operators'.
Notes	原著論文 付録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00003152-00000070-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原著論文

日本の文庫：
運営の現状と運営者の意識

Bunko in Japan:
Studying the Trends of Bunko Operation and
the Attitude of Bunko Operators

汐 崎 順 子
Junko SHIOZAKI

Résumé

Purpose: *Bunko* is a private activity providing library services for children, which is unique to Japan. After the World War II, the activity spread rapidly all over the country. The purpose of this study is to survey current situation of the *Bunko* activity in Japan and to examine how its operators (i.e., persons responsible for it) feel the activity.

Methods: In May 2010, questionnaires were sent to the operators of *Bunko* activities and valid 528 responses were obtained finally. The responses were analyzed quantitatively and qualitatively.

Results: Findings show that the number of organizations working as *Bunko* has decreased. The operators in the organizations are aging and their number is decreasing, which affects quality of the activity in terms of its facility and book collection, remarkably in the *Bunko* operated at private homes. Also, all of three core elements for the *Bunko* activity such as 'place', 'books' and 'mission' are not always succeeded when its operator was exchanged, and only one or two of them tend to be kept continuously, which is a feature of *Bunko* activity. In particular, books are an important element for keeping the activity. Sometimes a person who suspended the activity at one place continues it at another location. As for the motivation and reasons for engaging in *Bunko* activity, it turned out that their belief in the value of 'children's books', 'children' and 'an act of handing books to children' were main incentive to sustain *Bunko* activity. In addition, 16 characteristics were found from the *Bunko* operators' attitudes. These characteristics were categorized into four concepts: relationship with children, one's own lifestyle, relationship with others, and recognition of the role of *Bunko* activity and that of the operators'.

汐崎順子：慶應義塾大学，108-8345 東京都港区三田 2-15-45

Junko SHIOZAKI: Lecturer, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345, Japan
e-mail: shio-js@z6.keio.jp

受付日：2013年3月31日 改訂稿受付日：2013年6月30日 受理日：2013年7月15日

- I. はじめに
 - A. 研究の背景
 - B. 研究の意義と目的
- II. 調査の概要
 - A. 調査の目的と概要
 - B. 調査方法
- III. 調査の結果
 - A. 回答文庫の概要
 - B. 文庫の運営者
- IV. 文庫と運営者の現在
 - A. 家庭文庫への回帰
 - B. 運営者の変化と活動への影響
 - C. 文庫継続のさまざまな形
- V. 運営者の意識と姿勢
 - A. 不変の意識と姿勢
 - B. 変化した意識と姿勢
 - C. 「その他」の自由記述にみられた意識と価値観
 - D. 文庫の活動を支える運営者の意識
- VI. まとめ

I. はじめに

A. 研究の背景

1. 文庫、文庫の運営者とは

本研究は、戦後の草の根的な読書活動である文庫およびその運営者を対象としている。

「文庫」という言葉は、本来は「文献、文書、記録類を保存した書庫、転じて、まとまった蔵書や図書館¹⁾」を指し、出版形態を示す語としても使用されるが、本研究では、主として子どものために設置され、開放されている私設の読書施設および、そこでの活動を総称して「文庫」と定義している。清水正三は、「文庫とは、民間の個人やグループが自由に設置し、運営している子どものためのミニ図書館のことである²⁾」と簡潔に定義している。このように戦後の文庫は主として子どもを対象としている活動である。

1993年に実施された全国的な文庫調査（以下、「1993年調査」と呼ぶ）でも調査対象を「子ども文庫」と呼び、「地域の住民が主宰し（子ども会、町会、宗教団体なども含む）、児童書があり、地

域の子ども達に貸出しなどを行っていること³⁾を条件とした。高橋樹一郎は、「子ども文庫とは、民間の個人やグループが、自宅や地域の施設で、子どもを対象として、図書の閲覧や貸出し、お話し会や読み聞かせを行う私設の図書館のことである⁴⁾」と定義し、個人が自宅の一部を開放して行う家庭文庫、自治会・婦人会・PTAなどの集団が地域の施設を利用して行う地域文庫の総称として用いている。本研究の対象は高橋のいう「子ども文庫」とほぼ同義であるが、「子ども」という要素に限定されない面も検証することも意図し、「文庫」と表現を統一する。さらに他の読書推進活動との区別を明らかにするため、一定の場所を確保し、選書・収集・整理を行って本を揃え、子どもに提供する活動を行っていることを必須の条件とした。

文庫はいつでも、どこでも、だれでも開設できると同時に、その閉設も自由である。これらにより、全国にある文庫の正確な数、活動実態を網羅的に把握することはできない。また、文庫は本来、個々人の自発的な意志にもとづいた一種のボ

ランティア活動である。このため文庫を運営する者の意識、姿勢、取り組み方により、さまざまな活動内容や運営形態が生まれる。1993年調査では文庫の運営者を「世話人」もしくは「スタッフ」と呼び、“子ども文庫にとって最も重要な要素は世話人です。それは世話人が文庫の意義を考え、子どもの本を収集し、開設場所を探し、活動の内容を決めて、子ども文庫そのものを動かしていく原動力だからです”³⁾と述べている。この「世話人」という言葉がいつから使われ始めたのかは定かでないが、文庫関係者の間では一般的な用語となっている。本研究では、文庫に関わるさまざまな立場、役割を考慮し、主宰者、代表者・事務局、世話人など、文庫の運営に携わる人の総称として「運営者」を用いる。

2. 戦後の文庫

a. 誕生から現在まで

戦後の文庫は、母親たちを中心に地域の子どもたちに読書の機会を提供する場として生まれた。1951年から1960年を文庫活動の黎明期とした吉田右子は、道雄文庫ライブラリー(1951)、クローバー子供図書館(1952)、土屋児童文庫(1955)、かつら文庫(1958)の4文庫を例示している⁵⁾。このうち道雄文庫ライブラリーの主宰者は村岡花子、かつら文庫の主宰者は石井桃子で、ともに児童文学者である。この時期に生まれたこれらの児童文学者を主宰者とする先駆的な家庭文庫は、子どもの本と読書に大きな価値を置き、その後の各地での文庫の誕生と拡がりの火付け役となった。その啓蒙的な活動は、多くの文庫運営者の指針、さらに精神的な支えとなっていく。

文庫が大きく発展、普及するのは1960年代後半から1980年代前半にかけてである。1965年に刊行された『子どもの図書館』⁶⁾は、石井桃子が自宅に開いたかつら文庫での7年間の活動をまとめたものだが、この本は文庫活動に関する啓蒙書となり、以降の普及に大きな影響を与えたといわれている。たとえば清水はこの『子どもの図書館』の刊行を、文庫発展史の一つの区切りと考えている²⁾。清水は併せて1960年代の終わり頃か

ら1970年代にかけて、それまで主流であった家庭文庫から集団形態をとる地域文庫が目立ち始めたこと、その傾向が強まっていること指摘している。また個々の文庫を繋ぐ文庫連絡会が組織され、1970年代には、この連絡会を中心として公立図書館の設置を要求する住民運動も全国各地で展開されていく²⁾。

この文庫の発展期は戦後の高度経済成長期と重なる。この時期には都市化の進行、専業主婦の増加、公共施設の不足、教育の重要性の認識の高まりなど、新しい社会的な状況や価値観が生まれている⁷⁾。文庫を始める動機として、漫画やテレビの影響、受験勉強や塾など、子どもを取り巻く社会状況を憂慮する声があがるようになった。1970年代の半ばからは、この流れを反映するように、障がい児や帰国子女のための文庫など、活動内容や対象とする利用者の多様化などもみられた⁸⁾。

鳥弘は文庫の増加について“数の上では1980年前後にピークを迎えていると考えられる”⁷⁾、と言及している。1980年12月現在で、全国の4,406件の文庫から有効回答を得たとする調査報告⁹⁾がある。この調査は、後述するこれまでに実施された全国的な文庫調査の中で、最大規模である。

これ以降地域社会の変化、少子化、メディアの多様化など、子どもを取り巻く社会、および文化状況の変化を背景に文庫の数は徐々に減少する。しかし回収2,067件から1,888件を有効とした1993年調査では、文庫を網羅する調査の困難さを指摘した上で、“所在調査で把握した3,800文庫以上、少なめにみても4,000文庫前後の子ども文庫が全国各地で活動している”³⁾と推測している。

現在の文庫の数は明らかではないが、2008年に実施された読書推進運動協議会の調査では、公立図書館と何らかの関わりを持つ1,143の文庫があげられている¹⁰⁾。従来の家庭文庫、地域文庫が存在する一方で、NPO法人などになって組織化するなど、文庫の運営形態が変化している様子もみられる。

b. 文庫誕生の要因、背景、特徴

文庫誕生の背景には、戦後の悪書追放運動、貧

困な読書環境、劣悪な子どもの本の出版内容への危惧があった¹¹⁾。吉田は、当時の母親たちには貧しい子どもの読書環境の充実、という願いのほかに、女性の社会参加への想いがあったこと、さらに個々の文庫の運営者（主宰者）が文庫連絡会を中心に各地で図書館設置の住民運動を広げていった背景には、運営者が文庫の活動を通して公立図書館の本来あるべき姿を認識したり、住民自治を自覚したりしたことなどをあげている⁵⁾。

運営者の自発的な意志に基づいた文庫の活動、設置目的、活動理念、運営形態はさまざまであり、それぞれが独自かつ自由に活動を展開している。文庫の大きな特徴は多様性である、といえる⁸⁾。

c. 地域における子どもの読書施設としての役割、位置づけ

清水は、既に述べたように、家庭文庫と地域文庫を“私設のミニ図書館”²⁾、と捉える視点を示している。一方で公立図書館は、公的な立場から各地域社会で住民に読書の機会を提供する役割を担う。現在、児童サービスは公立図書館において不可欠な要素、機能と位置づけられ、社会に普及し、認知されている。小河内芳子は、“子どもがそこにくることも、本を選ぶことも、選んだ本を読むことも借りて帰ることもすべて自由であるのが、子どもの図書館である”¹²⁾と述べている。小河内は文庫と公立図書館をともに「子どもの図書館」と考えている。

ここからは、文庫と公立図書館の児童サービスとともに、地域における子どものための読書施設とサービスと捉えることができる。しかし、一方で文庫と公立図書館は、本来「私」と「公」、あるいは「民」と「官」という対立軸上に存在している。私的な活動である文庫と、公的な制度と枠組みのもとで運営される公立図書館は、全く異なる運営理念によって成立している。

小河内と松岡享子は、子どもに本を提供する仕組みは、組織としては公立図書館に属し、その機能が公立図書館の一部であること、すなわち公立図書館で展開されるべきものであると述べている^{13), 14)}。ここからは、公立図書館の児童サービ

スが社会で十分に機能すれば、文庫の存在は否定されるはずだが、戦後、児童サービスが普及した地域でも、吸収されることなく、児童サービスと並行して活動を続ける文庫が多数存在している¹⁵⁾。

実際、現在までの両者の関係、児童図書館員と文庫の運営者の認識をみると、この公私の側面が曖昧にされたり、一緒にされたり、個別に捉えられたりとさまざまに変化している。たとえば、戦後初期の1950年代には、公立図書館側が文庫をはじめとする私設の図書館を「まちの図書館」、「こども図書館」¹⁶⁾などと定義し、文庫の設置と活動を促進する動きがあった。小河内は、当初は児童サービスと文庫相互の連携や協力、役割分担などを公立図書館の視点から捉えていたが、後に文庫そのものの独自の役割と存在を重視する方向に視点を移行させる様子が見られた¹⁷⁾。石井や松岡は、家庭文庫の主宰者の立場から、公立図書館の一部門として児童サービスが普及、発展することを重視したが、結果として東京子ども図書館を自ら設立し、私立の立場から組織的に子どもへのサービスを行い、児童図書館員を育てる事業なども担っている¹⁸⁾。

B. 研究の意義と目的

1. 文庫の独自性

文庫は国際的にみてもユニークな日本独自の文化的活動である、と言及、紹介されている¹⁹⁾。しかし日本に限らず、各国において類似の子ども、青少年の読書環境を充実しようとする個人的な文化活動の事例を見出すことはできる。たとえばアメリカで最初の児童図書館として知られているのは1803年にケレブ・ピングラムが青少年のために開設した私設図書館であり、19世紀には多くの日曜学校に図書室が設置された²⁰⁾。アンドリュー・カーネギーは、南北戦争中ペンシルバニア州でジェイムズ・アンダーソン大佐が自宅を開放した文庫的な施設を利用していた²¹⁾。韓国では、嚴大燮（オム・テソプ）が1951年に私立の無料図書館を設立し、1960年に農村読書施設である「マウル文庫」を創案した²²⁾。

しかしこれらの動きは、どれも特定の時期、地域における一時的、限定的な現象であり、公立図書館など、公的な読書施設の整備と普及の中で、吸収され消滅していった。

日本の文庫活動が他の活動と異なるのは、第一にその規模と拡がり、第二に現在に至る継続性である。最初に全国的な調査が行われた1957年に所在が明らかになった文庫は48件だったが²³⁾、1969年には160件²⁴⁾、さらに1974年には2,064件²⁵⁾が確認された。地域的な、個人々の自発的な活動であったにもかかわらず、文庫は1960年代後半以降の極めて短期間に全国的な動きとして拡がり、各地域に定着したといえる。児童サービスが公立図書館における不可欠な要素、機能と位置づけられ、社会で普及、認知されるようになった現在も、多くの文庫がその枠組みに吸収されることなく存在している。全体数は減少しているものの、長年継続して活動する文庫だけでなく、新たに誕生する事例もみられる^{15), 26)}。

2. 先行研究・調査

a. 先行研究

松岡は文庫の独自性を述べた上で、文庫の活動についての、総合的かつ徹底的な調査と研究が行われること、その発展の跡を公立図書館との関わりにおいて詳しく論じた歴史がまとめられることが必要であると述べている²⁷⁾。吉田は公立図書館と文庫を独自に捉え、その上で地域コミュニティの読書空間を総合的に捉える研究がなされるべきであると主張すると同時に、文庫の研究に関する課題の多さ、難しさも指摘している⁵⁾。

Hotta Miyoko は文庫を日本における児童書の出版文化を形成する「アートワールド」の一要素として捉え、東村山市の文庫活動の事例研究をもとに博士論文をまとめた²⁸⁾。Hotta は“図書館も存在する中で、文庫は日本独特のものである”と言及し、研究課題の一つに“日本は特殊か”を設定しているが、この課題への結論は示されていない。

戦後の文庫を総合的、徹底的に捉えた研究は存在せず、文庫の独自性や多様性、誕生および発展

の背景、現在に至る活動を継続させている原動力が何かも解明されていない。

b. 過去の文庫調査

全国の文庫の実態を正確に把握していないものの、戦後の各時代において実施された文庫の全国的な調査の報告書、もしくは全国の文庫の所在地などを名簿として掲載している文献は複数存在する^{3), 9), 10), 16), 23)-25), 29)-38)}。調査の主体、目的、内容などはさまざまであるが、各内容を経年で比較検討することにより、戦後の日本における文庫数の増減の様子、社会における文庫の位置づけ、認識の変化などを追うことは可能である。なお第1表中の⑪と⑫は文庫から発生した文庫連絡会を対象とした調査だが、文庫の動きの経過を探る重要な調査であるため、表に含めた。また地域を限定して実施された小規模の文庫調査も多数存在するが、ここでは対象外とした。

第1表中、文庫数が最大なのは1980年の調査⑨の4,406件である。⑭、⑯、⑰の読書推進協議会が実施した調査は、文庫の調査が本来の目的ではなく、読書活動に関係する団体を広く集計しているため、結果は各調査年に把握した文庫数に留まるが、日本図書館協会と児童図書館研究会が行った各調査の目的、結果の記載から調査当時の図書館界における文庫の捉え方や認識の変化が分かる。

たとえば、文庫の活動が活発化する1965年以前に実施された①から④の調査では、文庫は公立図書館の児童室と同様の機能と役割を持つものと位置づけられている。当時の文庫には、公立図書館が充実、普及するまでの一種の代替的、補完的な施設としての役割が求められていることを表している。文庫主宰者の、“家庭文庫というものは、将来にはその土地の図書館に吸収発展されるのが理想”²⁷⁾という一文からは、文庫側も同様の意識を持っていたことがうかがわれる。

文庫の発展期、最盛期である1960年代後半から1980年代前半までの間に実施された⑤から⑩の調査では、文庫を図書館づくりの住民運動の母体として強く意識している。たとえば⑥の1970年の調査では、図書館空白地域をなくすことが図

第1表 全国的な文庫調査報告書および名簿掲載文献

No.	調査年	掲載書名・調査報告書名 (引用文献番号)	調査主体	掲載文庫数 (採用数)*注1
①	1957	『日本の児童図書館 1957: その貧しさの現状』 ²³⁾	日本図書館協会 (分科会)	48
②	1958	『年鑑こどもの図書館 1958 年版』 ²⁹⁾	日本図書館協会 (分科会)	59
③	不明	『こども図書館の手引』 ¹⁶⁾	日本図書館協会 (分科会)	85
④	不明	『年鑑こどもの図書館 1963 年版』 ³⁰⁾	児童図書館研究会	47
⑤	1969	『年鑑こどもの図書館 1969 年版』 ²⁴⁾	児童図書館研究会	160
⑥	1970	『地域家庭文庫の現状と課題: 文庫づくり運動調査委員会報告』 ³¹⁾	日本図書館協会 (分科会)	265
⑦	1974	『年報こどもの図書館 1975 年版』 ²⁵⁾	児童図書館研究会	2,064
⑧	1978	『親子読書・地域文庫全国連絡会実態調査』 ³²⁾	親子読書地域文庫 全国連絡会	213
⑨	1980	『年報こどもの図書館 1981 年版』 ⁹⁾	児童図書館研究会	4,406
⑩	1981	『子どもの豊かさを求めて: 全国子ども文庫調査報告書』 ³³⁾	日本図書館協会 (委員会)	1,878
⑪	1984	『親地連この十五年』 ³⁴⁾	親子読書地域文庫 全国連絡会	連絡会調査
⑫	1987	『子どもの豊かさを求めて: 全国子ども文庫調査報告書 2』 ³⁵⁾	日本図書館協会 (委員会)	連絡会調査
⑬	1993	『子どもの豊かさを求めて: 全国子ども文庫調査報告書 3』 ³⁾	日本図書館協会 (委員会)	1,888
⑭	1998	『1998 年度全国読書グループ総覧』 ³⁶⁾	読書推進運動協議会	3,178
⑮	2001	『子ども BUNKO プロジェクト報告書』 ³⁷⁾	伊藤忠記念財団	934 (発送数)*注2
⑯	2003	『2003 年度全国読書グループ総覧』 ³⁸⁾	読書推進運動協議会	1,510
⑰	2008	『2008 年度全国読書グループ総覧』 ¹⁰⁾	読書推進運動協議会	1,143

*注1: 掲載、あるいは分析に採用した最終的な有効文庫数

*注2: “子ども文庫・お話し・読み聞かせのグループへの発送数 (この調査に関しては発送の内訳、回収数が不明)

書館協会、図書館界の大目標であり、民主社会においては住民の力が不可欠であることを述べた上で、“地域文庫こそはその中の非常に有力な現実”³¹⁾と明言している。文庫の独自性、地域における文庫と図書館の共存の必要性についても述べられるようになった。

日本図書館協会と児童図書館研究会による全国的な調査は⑬の1993年が最後である。この時期には文庫は図書館の肩代わりではなく、図書館がバックアップしていく市民の運動と述べられ、双方がお互いに主体性を保ちつつ協力していくことが期待されている³⁾。

3. 研究の目的

文庫という日本独自の文化活動を明らかにすることは、子どもの読書、子どもの本に対する日本独自の考えと信念の体系を社会的、文化的レベルで明らかにすること、並びに子どもの読書環境の整備における課題や問題点を示すことにつながる。

しかし、個々人の自発的な、自由な草の根の活動である文庫の実態は捉えにくく、多様な内容を総括することは難しい。個々の事例、地域別の研究と併せ、文庫全体の動き、歴史的な総括、文庫の活動全体として共通する、一般化できる要素を見出すことも必要である。とりわけ文庫運営者の意識は、文庫の活動を明らかにするために不可欠かつ重要な要素である。本研究では実施した全国的な質問紙調査の結果から、日本の文庫活動の現状を運営者の現況および意識と関連づけて示すことを目的とする。

II. 調査の概要

A. 調査の目的と概要

今回の質問紙調査は、日本の文庫の現状と変化の様子および、現在の運営者の文庫に取り組む意識を明らかにするための客観的、量的データを得ることを目的とした。このため1993年に実施された最後の全国的な文庫調査³⁾(1993年調査)と

の比較ができるように質問項目を設定し、さらに運営者の意識を詳細に問う内容を加えた構成とした。

実際には、全国の文庫を網羅した調査の実施は不可能である。調査結果に代表性を持たせられる妥当な数を検討するために、現在の文庫の数ほどの程度なのかを把握する必要がある。調査の企画時点で全国の文庫の最新の情報を提供していたのが『2008年度全国読書グループ総覧』¹⁰⁾だった。これは社団法人読書推進運動協議会が全国公共図書館協議会の協力のもと、各都道府県立図書館を窓口に関東の公立図書館、図書館類縁機関に登録されている読書関係団体の実態を調査した報告書である。文庫については「1,143」という数字が示されている。実際はこの調査も網羅的なものとはいえず、掲載されている所在地情報なども最小限であるが、全国の文庫の数や分布などを知るための大きな手掛かりとなる。本研究では、この数字から調査のための質問紙発送数の目標を1,000件とした。

B. 調査方法

1. 対象の抽出

現在、個人情報でもある文庫の所在地、主宰者の把握は困難である。そこで第一段階として、個々の文庫よりも開放性、公共性、継続性が高い文庫連絡会の所在地、代表者などを調べ、事前に質問紙調査を実施した。この先行調査では文庫連絡会の組織構成、活動などを尋ねると同時に、各文庫連絡会の会員である文庫に対して質問紙調査の協力が可能かどうか打診した。併せて過去の文庫調査の結果や文献調査、インターネット上での検索などから、発送可能な文庫の所在地を調査した。さらに執筆者が所属する児童図書館研究会、文庫への助成事業を行っている伊藤忠記念財団に協力を求めるなど、幅広く送付先の文庫を把握することに努めた。

2. 質問紙調査の内容

質問項目として設立年、運営者、会員数、開庫日数、貸出数、蔵書数、活動内容などの基本的情

報、地域との関わりなどを設けた。1993年調査からの変化の有無とその背景を探るために、調査結果が比較できる内容とした。さらに、現在の運営者の文庫に取り組む意識を明らかにするため、文庫を始めた動機と文庫を続けている理由を尋ねる選択肢形式の質問を特別に設けた（質問票は、「付録」を参照）。

3. 発送、回収

2010年5月から1)各文庫への個別発送と、2)連絡会経由の発送の2つの方法で質問調査票を発送した。発送の方法が2通りになったのは“調査に協力するが文庫の住所は教えられない”，と回答があった連絡会に対しては、個人宛ではなく、指定された数を連絡会に送って発送を依頼したためである。この連絡会経由の発送の中には、実際の文庫に送付したのか分からないものもあったため、個別に送った文庫と連絡会会員の文庫が重複した可能性もある。一方で予想外の形で数が増えたこともあった。これは受け取った用紙をコピーなどして知り合いに送った文庫があったためである。既に送付した文庫からの情報提供や、未送付の文庫が新たに判明したことなどもあり、断続的に同年8月まで発送を行った。このため実際の配布数は正確に把握できないが、送付数は個別発送779件、連絡会経由375件、合計1,154件であった。発送が一斉でなかったため返送も8月末まで続き、最終回収数は638件（回収率55.3%）になった。

4. 有効回答の抽出

回収した638件から有効なものを判断し、抽出するための条件を設定した。今回は「現在の文庫」の調査であるため、大きな判断基準は先に述べた「文庫」の定義をもとに、1)文庫かどうか、2)現在活動をしているか、3)営利を目的としない私的な活動か、4)子どもが活動の対象となっているか、5)活動に公共性・開放性があるか、の5点とした。

まず想定した「文庫」とみなせない回答が44件あった。多くは読み聞かせなどの実践団体、読

書会、子どもの本の勉強会などである。これらは子ども、子どもの本、子どもの読書に関わる活動という面では文庫と同じだが、一定の場所を確保し、選書・収集・整理を行って本を揃え、子どもに提供する、という文庫の定義から外れる。このような回答があった理由は、連絡会経由では全会員に送付していた会があったが、文庫だけで構成されていない連絡会も多かったこと、実質的には読み聞かせなどの実践団体だが名称が「〇〇文庫」だったため発送段階で判別できなかったこと、などがあげられる。回答の内容をみると、受け取った側も「何を文庫と考えるのか」という意識が曖昧で、文庫の解釈の幅広さもうかがわれた。自身の活動が文庫でないことを承知の上で“こういう活動もしています”と回答したものの、“三年前にやめてしまったけれど”、と当時の文庫の様子を書いたものもあった。これらも除外した結果、最終的な有効数は528件（発送数の45.8%）となった。

5. 集計、分析方法

まず有効回答の記入内容から「家庭文庫」、「地域文庫」のどちらであるかを判断し、分類した。さらに各設問への回答を入力した。数値化したデータは適宜集計して分析を行った。数値化できない自由記述欄などについては、記入内容をそのまま別途入力し、個々に内容を検証した。

III. 調査の結果

ここでは調査結果から文庫の現状の全体像および、文庫運営者の意識を示す特徴的なものを抽出して述べる。適宜1993年調査との比較も行い、変化の有無についても言及する。

A. 回答文庫の概要

1. 家庭文庫と地域文庫の比率

回答528件のうち、文庫を開いている場所が個人の家や敷地内である家庭文庫は242件（45.8%）、個人の家以外の地域文庫は286件（54.2%）だった。1993年調査では家庭文庫の比率が38.9%で、かつ家庭文庫は減少の傾向にあ

る³⁾、と指摘されたが、今回の調査結果では、全体の家庭文庫の比率は1993年調査より高く、特に1990年代以降に設立した文庫240件の内訳をみると、地域文庫97件、家庭文庫143件と、家庭文庫の方が実数も多い（第2表）。

2. 地域分布

回答の文庫数を地方別にみると、1位関東地方（168件）、2位近畿地方（117件）、3位中部地方（75件）、4位九州・沖縄地方（64件）で全体の80.3%を占めた。これら上位4地方を含め、地域別の文庫の分布の比率は、1993年調査と類似の傾向だった（第3表）。

比率上は文庫活動の地域性、すなわち活動が盛んな地域とそうでもない地域は、1993年から大きな変化がない。さらに家庭文庫と地域文庫の数を地域別に比較すると（家庭文庫：地域文庫）、1位の関東地方は69：99、2位の関西地方は47：70、3位の中部地方は45：30、4位の九州・沖縄地方は22：42と傾向の違いがみられた。地

第2表 文庫数と設立年

年代	家庭文庫	地域文庫	合計
～1969	4	5	9
～1979	44	73	117
～1989	50	108	158
～1999	60	51	111
～2010	83	46	129
不明	1	3	4
合計	242	286	528

第3表 地域別文庫数

地域	2010年	1993年調査
	数 (%)	数 (%)
北海道・東北	51 (9.7)	206 (10.9)
関東	168 (31.8)	598 (31.7)
中部	75 (14.2)	292 (15.5)
近畿	117 (22.2)	398 (21.1)
中国	32 (6.1)	109 (5.8)
四国	21 (4.0)	46 (2.4)
九州・沖縄	64 (12.1)	239 (12.7)
合計	528	1,888

域別の分布、家庭文庫と地域文庫の比率の違いについては、各地域の社会的、文化的状況などが関連していると推察される。

都道府県別の文庫数の上位5位は、1位東京、2位埼玉および大阪、4位神奈川、5位千葉だった。上位10位までの順位を1993年調査と比較したところ、こちらも概ね大きな変動はみられなかった。

一方で栃木、群馬、鳥根の3県は0件、秋田、山形、長野、徳島、佐賀の5県は各1件だった。今回の調査は文庫連絡会を中継点にした会員文庫への発送が多く、その他の文庫の把握が十分でなかったという問題点もあるが、全国の文庫数を概観するために参考になっている『2008年度全国読書グループ総覧』¹⁰⁾でも、これらの県では文庫数が少ない傾向がみられた。

3. 設立年、継続年

文庫の設立年は、1949年(1件)から2010年(3件)までの約60年にわたっていた。1970年代から10年区切りでみると、数の上では新旧が混在している(第2表)。

全体数では地域文庫が家庭文庫より多いが、設立年を1990年代以降に絞ると家庭文庫の方が多く、家庭文庫の全体に占める比率の増加傾向は年を追うごとに強くなっている。たとえば2000年以降に開いた129文庫のうち、家庭文庫は83件(64.3%)で、調査年の2010年に設立した3件は全て家庭文庫だった。

今回の調査で最も設立年が古い1949年設立の地域文庫は、現在は文庫の活動中心というより、地域住民が自主的に運営するコミュニティセンター的な役割を持ち、各種の文化活動の場として活用されていた。設立年が1960年代の文庫は家庭文庫と地域文庫が各4件、合計8件だった。この8文庫は設立から概ね半世紀の間、活動を続けていることになる。なお1950年代設立の文庫数は0件だった。第2表からは、1970年代、1980年代に設立した文庫もそれぞれ100件以上存在していることが分かる。家庭文庫、地域文庫ともに多くの文庫が30年、40年という長期間にわたっ

て継続して活動している。

4. 施設、蔵書

活動をする場所、蔵書を保管する場所は、家庭文庫では「住居の一部を文庫の時に利用、開放」が125件(51.7%)、「住居とは別の独立した建物(プレハブやログハウスなど)」が58件(24.0%)、「専用の部屋や書庫」が54件(22.3%)、「不明、その他」は5件という回答であり、半数近くの文庫が独立した部屋、建物などを文庫専用に用意、提供していた。

地域文庫は、町内会や自治会の施設(78件、27.3%)、公民館(71件、24.8%)を利用しているものが多く、公的・準公的な地域住民の共有スペースが文庫の開催場所として活用されている(第4表)。1993年調査でも「町会等の施設」を利用している地域文庫が最も多かった。

回答528文庫のうち、具体的な冊数の記入がなかった12件(家庭文庫7件、地域文庫5件)を除いた516文庫の蔵書数の合計は約140万冊、平均は2,702.6冊だった。これを家庭文庫、地域文庫別にみると、家庭文庫の平均冊数は3,034.9冊で、地域文庫の2,424.7冊より600冊ほど多い。

第4表 施設と活動の場

家庭文庫	数(文庫)
1 家の一部を利用(居間・玄関など)	125
2 敷地内に独立した建物を用意	58
3 文庫専用の部屋を用意	54
* 不明・その他	5
	合計 242
地域文庫	数(文庫)
1 町内会・自治会等の施設内(集会所など)	78
2 公民館内	71
3 公の施設内(公民館・児童館以外)	30
4 マンション・団地等の施設(集会所など)	29
5 教会・寺社内	18
6 学校・幼稚園・保育園内	10
7 児童館内	9
8 NPOや財団法人として建物を管理運営	5
* その他	36
	合計 286

町内会や自治会の集会所などの施設、公民館などで活動する地域文庫の方が、蔵書冊数が多いことを予想していたが、それに反した結果となった(第5表)。

続けて蔵書冊数の規模別に文庫数を示す(第6表)。家庭文庫は2,000～2,999冊(75件, 31.0%), 地域文庫は1,000～1,999冊(74件, 25.9%)の蔵書規模の文庫が多かった。

1993年調査では、“今回の調査では「2,000冊以内」(1,001冊～2,000冊)が一番多く、「1,000冊以内」(501冊～1,000冊)がそれに続いています”³⁾、との言及があった。ここからも、個々の文庫単位でも、蔵書冊数は増加傾向にあることが分かる。

蔵書数が1万冊を越える文庫は全体で10件だった。最も蔵書冊数の多かった家庭文庫(20,000冊)は“敷地内に40坪の図書館”, 地域文庫(22,000冊)は“法人敷地内にある子供図書館”という回答だった。双方とも専用の独立した建物で活動している。

第5表 文庫の蔵書数

	蔵書 (冊)	平均 (冊)	分母	不明	実数 (文庫)
家庭文庫	713,213	3,034.9	235	7	242
地域文庫	681,349	2,424.7	281	5	286
全体	1,394,562	2,702.6	516	12	528

第6表 蔵書冊数別の文庫数

蔵書数 (冊)	家庭文庫 (文庫)	地域文庫 (文庫)	合計 (文庫)
～499	8	23	31
～999	19	37	56
～1,999	40	74	114
～2,999	75	63	138
～3,999	43	33	76
～4,999	14	20	34
～5,999	12	12	24
～9,999	17	16	33
10,000～	7	3	10
不明	7	5	12
合計	242	286	528

1993年調査以降の傾向として、家庭文庫を中心として蔵書冊数は増加、施設はより広く充実していることが大きな特徴であるといえる。

B. 文庫の運営者

1. 回答者の属性

先に述べたように文庫の運営者を総称して「世話人」と呼ぶことが多いが、複数の人々が運営する文庫では、各人が異なる役割を担っている。それぞれの立場によって、文庫に対する意識が異なる可能性もある。そこで本調査では、「運営者」を総称として用い、基本的に自宅を家庭文庫として開放している運営者を「主宰者」、地域文庫の組織的な活動の中心的な運営者を「代表者・事務局」、一関係者、スタッフとして活動を支えている運営者を「世話人」と区分した。その上で回答者の立場や役割を把握するために、①主宰者、②代表者・事務局、③世話人、④その他、の4項目から選択してもらった。

回答者は「主宰者」が264人(50.0%)、「代表者・事務局」が185人(35.0%)と、大多数が各文庫の中心的な運営者だった。なお「その他」を選んだものの説明として、“子どもの幼稚園が一緒の友人と始め、現在まで協力して続けている”, “主宰者の長男の妻”, “育成会会長”, “副代表”, “PTA副会長”, “副代表”などの記述がみられた。これらは想定した区分では「世話人」にあると考えられる。

2. 運営者の文庫歴

第7表では、回答した運営者の文庫活動に関わった年数を「文庫歴」として示す。

文庫歴の最長は家庭文庫の主宰者の45年だった。この文庫は1975年設立なので、運営者の文庫歴(以下「文庫歴」と呼ぶ)は今運営している文庫の継続年(以下、「継続年」と呼ぶ)より長い。この視点から文庫歴と継続年を比較すると(第8表)、文庫歴が継続年と同じものが最も多かった(286件, 54.2%)、この結果からは、半数以上の運営者が創設以来ずっと同じ文庫で活動を続けていることが予想される。なお家庭文

庫、地域文庫を個々にみると、運営者の文庫歴と文庫の継続年が同じなのは家庭文庫が78.4% (181/242)、地域文庫が36.7% (105/286) であり、家庭文庫の比率の方が高い。

文庫歴が継続年より長いのは60件だった。全体の11.4%の運営者が現在の文庫での活動以前に他の文庫に関わっていることになる。こちらは家庭文庫と地域文庫の差は小さかった。

文庫の種別に見てみると、文庫歴が継続年より短い家庭文庫は28件で、家庭文庫全体の11.6%、地域文庫は144件で地域文庫全体の50.3%と、結果に大きな差がみられた。これは個人が主の活動である家庭文庫、グループが主の活動である地域文庫、という運営形態の違いによるところが大きいと思われる。

3. 運営者の人数

文庫単位の運営者数をみると、家庭文庫、地域文庫ともに10人以下の比率が高い(408件、

77.3%)。特に家庭文庫では一人での運営が80件で家庭文庫全体の33.1%と顕著であり(第9表)、2000年以降に設立した83文庫中36文庫(40.9%)が一人の運営だった。

なお、最も人数が多かったのは2000年に子ども会を運営主体に設立した地域文庫の70人だった。しかしこれは稀な事例である。全体の傾向として、少人数で運営する小規模の文庫が多く、特に家庭文庫で個人化が進行している。

4. 運営者の年齢、性別

年代別の構成は40歳代～60歳代が2,872人で全体の78.4%を占めた(第10表)。

“年代が移行する傾向は見えるが、30～40歳代が世話人の中心的な年齢層”³⁾と報告された1993年調査(30代は43.5%、40～60代は46.5%)から、さらに運営者の高齢化が進行していた。長年活動している文庫では、継続して関わっている運営者の高齢化は当然考えられることだが、この高齢化の傾向は、2000年以降設立の文庫でも40歳代～60歳代までの合計が75.8%と同様だった。これは新たに文庫を始める運営者も、高齢者が多いこと示唆している。

文庫活動の主体は女性である。1993年調査でも男性の運営者は全体の5%未満だったが、今回も3.2%と男性は少なかった。一方で全体数は少ないものの、男性は高齢になるほど、文庫の活動に関わる者が多くなる様子がみられた。たとえば2000年以降に設立された文庫では男性の運営者の比率は5.9%だった。

5. 継続の意志

設問「今後も文庫を続けようと思っていま

第7表 運営者の文庫歴

文庫歴 (年)	家庭文庫 (人)	地域文庫 (人)	合計 (人)
～5	42	25	67
～10	38	44	82
～15	29	50	79
～20	28	40	68
～25	32	41	73
～30	30	46	76
～35	16	23	39
～40	19	11	30
～45	6	2	8
不明	2	4	6
合計	242	286	528

第8表 現在の運営者(回答者)と文庫との推定される関係

文庫歴と継続年	家庭文庫	地域文庫	合計 (%)	考えられる現在の文庫と運営者(回答者)の関わり
文庫歴>継続年	30	30	60 (11.4)	継続: 現文庫の設立以前に文庫活動を開始
文庫歴=継続年	181	105	286 (54.2)	継続: 現文庫の設立から文庫活動を開始
文庫歴<継続年	28	144	172 (32.6)	交代: 現文庫の設立後に活動を開始
不明	3	7	10 (1.9)	(不明)
合計	242	286	528 (100.0)	—

第9表 運営者の人数

人数 (人)	家庭文庫 (文庫)	地域文庫 (文庫)	合計 (文庫)
1	80	16	96
2	27	19	46
3～5	48	77	125
6～10	55	86	141
11～15	11	46	57
16～20	5	18	23
21～30	2	9	11
31～	1	9	10
不明	13	6	19
合計	242	286	528

第10表 運営者の年代と性別

年代	女性(人)	男性(人)	合計(人)
10代	30	7	37
20代	45	2	47
30代	410	8	418
40代	995	15	1,010
50代	989	18	1,007
60代	822	33	855
70代～	255	34	289
合計	3,546	117	3,663

すか？」で、「思う」を選択したのは、451人(85.4%)、「思わない」は5人、「分からない」は64人、未記入は8人だった。家庭文庫、地域文庫ともに運営者の高齢化や少人数化、利用者の減少などのマイナス要素を危惧しながらも可能な限り活動を続けたい、という運営者が大多数だった。

6. 文庫を始めた動機、続けている理由

文庫を始めた動機、続けている理由については、それぞれ14の具体的な記述と「その他」として内容を自由記述で尋ねる15項目から5つまでを選択してもらった。動機と理由について同じ番号の選択肢は、同じ、もしくは類似の内容とした。この回答結果を集計し、回答数による順位づけを行った(第11表)。

「文庫を始めた動機」(以下「動機」と省略)、「続けている理由」(以下「理由」と省略)の双方

で回答数が多く高順位だったのは、「子どもの本が好き」(選択肢2, 動機, 理由の双方で1位)、「子どもが好き」(選択肢1, 動機, 理由の双方で2位)、「お話や読み聞かせをするのが好き・楽しい」(選択肢3, 動機3位, 理由4位)、「子どもに自分の好きな本を手渡すのが好き・楽しい」(選択肢4, 動機4位, 理由5位)だった。

一方で動機と理由の順位の差が4以上のものは、「自分の子の読書環境の充実のため」(選択肢5)、「子どもの学校, 友人の関係」(選択肢8)、「仲間や友人とのつながり」(選択肢10)、「地域活動の一環, 必要性」(選択肢11)、「近隣の読書施設の有無」(選択肢14)だった。

なお選択肢中の「その他」は256件(動機156件, 理由100件)だった。こちらは想定した動機と理由以外の運営者の意識である。この動機および理由に関する回答については、「その他」の自由記述欄に書かれた具体的な記載と併せて、第V章で詳しく検証する。

IV. 文庫と運営者の現在

今回の調査では、文庫の数は減少しているものの、1993年調査と地域性は大きく変わらないことが分かった。一方で家庭文庫の比率が増加していること、特に家庭文庫で施設や蔵書の充実の傾向が強いこと、新旧それぞれの文庫で運営者の高齢化と少人数化が進んでいること、などの変化がみられた。ここではこれらの変化とその背景について、運営者を中心に考察する。

A. 家庭文庫への回帰

戦後の文庫は、主として家庭を活動の場として始まった。これらの家庭文庫は、自宅の一室や玄関先などを一時的に解放するものが主で、提供する蔵書数も少なく、限られたスペースと冊数でささやかな活動を行っていた。この初期の文庫活動については、清水が“文庫設置の動機の最大のもの、子どもの読書環境の貧しさによる母親たちの文化要求であるが、その要求のなかには、かならず「すぐれた本を」という要望が内在している”²⁾、と述べているように、我が子の健やかな

第II表 文庫を始めた動機と続けている理由

家庭文庫 (人)	地域文庫 (人)	合計 (人)	1. 文庫を始めた動機	順位	設問	順位	2. 文庫を続けている理由	順位	合計 (人)	家庭文庫 (人)	地域文庫 (人)	変化 (1-2)
133	158	291	子どもが好きだから	2	1	2	子どもが好きだから	2	305	129	176	0
174	197	371	子どもの本が好きだから	1	2	1	子どもの本が好きだから	1	361	167	194	0
114	116	230	お話や読み聞かせをするのが好きだから	3	3	4	お話や読み聞かせをするのが楽しいから	4	275	128	147	- 1
120	109	229	自分の好きな本を子どもに手渡したかったから	4	4	5	自分の好きな本を子どもに手渡せるから	5	200	109	91	- 1
63	105	168	自分の子の読書環境を充実させたかったから	6	5	12	自分の子の読書環境を充実させたかったから	12	33	13	20	- 6
44	36	80	自分を文庫で活かしたかったから	10	6	7	文庫はやりがいがあるから	7	125	56	69	3
34	30	64	過去の文庫利用経験が楽しかったから	11	7	8	文庫の楽しさを他の人に伝えたいから	8	124	45	79	3
14	68	82	子どもの学校や友人の関係から誘われたから	9	8	14	子どもの学校や友人の関係があるから	14	11	4	7	- 5
1	17	18	町会など地域の関係から誘われたから	14	9	13	町会など地域の関係があるから	13	22	2	20	1
11	19	30	仲間や友人がほしかったから	13	10	6	仲間と一緒にいるのが楽しいから	6	146	48	98	7
80	83	163	地域活動の一環として	7	11	3	地域で文庫の活動が必要だと思ふから	3	302	125	177	4
10	21	31	ボランティアの活動に参加したかったから	12	12	11	ボランティアの活動を続けたいから	11	62	30	32	1
4	10	14	図書館や行政から呼びかけがあったから	15	13	15	図書館や行政からの要望があるから	15	9	2	7	0
108	110	218	近くに図書館などの読書施設がなかったから	5	14	9	近くに図書館などの読書施設がないから	9	116	56	60	- 4
85	71	156	その他	8	15	8	その他	8	100	62	38	0

成長のために、子どもの読書施設の貧しさ、児童書の質と量の問題を解決したいと願う、親としての私的な、個人的な感情が大きかっただろう。

以降、急速な活動の普及や利用の増大の流れの中で、集団で組織的に運営する地域文庫が誕生し、増加した。1970年の調査では区分の方法が異なるため、正確な比較はできないが、“責任者個人および家族で経営しているもの”を家庭文庫と捉えることができる。この範中の文庫は責任者が自分の考えを生かして運営しているため、その人でなければできないユニークな文庫があるものの、個人では資金や労働力の面で限度があり、責任者以外に複数の関係者が加わって委員制、役員制で運営する地域文庫が多くなっている、と調査報告書では述べられている³¹⁾。

1978年の調査でも、従来は自宅の一室などを活動の場とする家庭文庫が多かったが、半公共的な場所へ文庫を設置するケースが増えたことを反映して、家庭文庫の比率が減少している(42.7%)、と地域文庫に活動の場が移行していることが指摘された³²⁾。

さらに1993年調査でも、家庭文庫は減少の傾向にあると報告されたが³⁾、今回の調査では比率上では増加の傾向がみられた。初期の形態と同様の小規模な文庫も多く存在していたが、特にこの家庭文庫での施設、蔵書の充実ぶりが顕著であった。

ここであげた家庭文庫への運営形態の移行、施設、蔵書の充実には、運営者の構成の変化が大きな影響を与えていると考えられる。現在、文庫の運営者は高年齢化、少人数化している。この傾向は長年継続している文庫と新しく誕生する文庫の双方にみられる。長年続いている文庫では活動の継続とともに運営者自身も高齢化していること、新しく設立する文庫では子育てを終えた世代、退職した世代の運営者が増加していることが高齢化の大きな要因だろう。特に後者は、子育て中の若い母親が我が子の貧しい読書環境の改善のために自ら文庫の運営者になった初期の動きと明らかに異なっているといえる。

個人的な感情を主とした草の根的な活動である

文庫は短命だと考えられる。しかし今回の調査結果では、多くの文庫が長年にわたって存続し、子どもに本を手渡すという文庫本来の活動の形を保っていた。

運営者の文庫歴と文庫設立からの継続年の比較からは、組織的にグループで活動を行う地域文庫だけではなく、個人的な活動が主である家庭文庫でも、運営者が世代交代する継続、継承の様子がみられた。特に自由記述の内容からは継続のさまざまな形を読み取ることができた。

こうした運営者の変化、およびその変化が文庫の活動内容にもたらした影響、さまざまな継続の形については、それぞれ自由記述欄に記入された回答者の具体的な記述も併せ、改めて次節で詳細を述べる。

B. 運営者の変化と活動への影響

高齢化、少人数化などの運営者の変化の要因としては、戦後の女性の社会における立場の変化が大きいと思われる。島は1993年調査の結果を検証する際、世話人の減少の要因として、文庫の運営者の9割を占めている女性の就業率の増加をあげている。併せて文庫の発展期は1950年代半ばから1970年代はじめの高度経済成長期に重なり、この時代に数多く生まれた専業主婦が主たる文庫の担い手となったと述べている⁷⁾。戦後は民主化、高学歴化が進み、女性の社会参加への意欲や希望が徐々に高まったが、当時はまだ女性が活躍できる場や機会は多くなかった。

同様に吉田も文庫の研究を行うためには、“母親たち自身のための文庫活動”、“運営者の自己表現の場としての文庫”という視点も必要であると述べている。吉田は、母親を子どもと本を結びつける媒介者としてのみでなく、自らが成長し、主体的に生きるために文庫の活動に参加する存在として捉えようとした。戦後初期の文庫が、女性の社会参加の場であり、自己実現の場、自己の存在を確認する場でもあったという見方である⁵⁾。

これらの論をふまえた上で、今回の調査結果を検証すると、現在の運営者の高齢化、少人数化に関わる大きな二つの要因がみえる。

第一は、若い女性の就労率が上昇し、働く女性が増加していることである。総務省統計局の「労働者調査」によれば、平成23年の女性の雇用者数は2,237万人で前年に比べて8万人増加している。雇用者総数(5,244万人)に占める女性の割合は42.7%である。昭和60年からの推移をみると、この女性の就労率の割合は増加の一途にある。パートタイム労働が多い、男性と比べて勤続年数が短い、管理職比率も低いなど、依然として多くの問題はあがるが、社会で女性が働くことが当然とみなされる時代になった³⁹⁾。この流れの中、専業主婦が減少し、多くの若い母親が働いている。

「[運営に携わっている人]について気づいたこと、気になっていることなどがあつたらお書き下さい」、と尋ねた自由記述欄への記入には、“子育て真最中のお母さんは仕事が多忙、就職難の時代、家計を支えることや教育費捻出のため働く人が増えました。文庫活動のようなお金にならないことはできにくいと思います”、“子どもが少し大きくなると短時間でも働きに出るお母さんが増えました”、“子どもに手がかからなくなると勤めに出られる方が多い”、“仕事を持つ人が多くなって携わってくれる人が年々少なくなり、苦勞しています。最近では子どもの手が離れると、仕事を持つお母さんが多いので”、“このご時勢、フルタイムの仕事につかれるということで、活動をやめなければならない方が出てきています”など、多くの母親が子育て中も、子育てが一段落した後にも働いているため、日常的に文庫の活動に関われない状況になっていることが多く書かれていた。

さらに“若い世代の人は、家事やPTA、パートタイムなどで常に参加してもらうのはむしろかしい”、“最近の主婦の方々は皆さん、色々な趣味や活動をお持ちなので、とにかく忙しそうです”、“仕事(フルタイム、パートetc)、家事、育児、介護など皆忙しく、また子どもの学校の行事等あり、相談する時間、本の勉強の時間がなかなかとれないのが現状です”など、仕事以外でも母親の生活が忙しくなっていることが、文庫の活動に参加することの障害となっている。

現在の若い母親たちが皆そうだとはいえないが、年輩者と若い母親の間には、文庫の活動に参加する意識の違いがある、と指摘する意見もあった。“ボランティアの意識も変わってきているように思います”、“若い方に引き継ぎたいと思いますが、皆さん忙しく、手伝いは出来るが、任されるのはちょっと困るということです”、“若い人の傾向としては、以前よりも好きなことはするが、嫌いなことはしたくないと意見をはっきり言われることです。好きなことは本当に熱心にされています”、“参加はするが自分はお世話する気はないという傾向です”などである。

ここからは、現在は自分の忙しい生活の時間をやりくりして、一種のボランティア活動である文庫の運営者になろうという意識までには至らない母親も多いことが推察される。

これらは文庫活動にとっては、否定的な要素であり、現在の高齢の運営者自身の高年齢化への不安、若い後継者不足による文庫の将来的な存続を危惧する意見も多くあがっていた。

第二は、文庫の活動に興味を持ち、経済力と時間にゆとりのある者、具体的には子育てを終えた40歳代、50歳代、さらに退職した60歳代以上の運営者が増えていることである。“若い方々は仕事中心にせざるを得ない経済、社会状況にあり、当会では50代～70代を中心に活動している”、“世話人が高齢になったことは同時に時間のゆとりができ、毎回全員休まず集まる。結果として人数も足り、他の人が入ることもない”、“スタートが子育てを終えた年代の女性が地域活動のひとつとして発足した”、“仕事を辞めたことで自分の時間ができたから”などの記述があった。

また、運営者の多くが「長年の夢の実現」という想いを持っていた様子もみられた。文庫を始めた「その他」の動機の自由記述欄に“ミニ図書館を造るのが子どもの頃からの夢だったので、それを実現した”、“石井桃子さんの家庭文庫にあこがれていたから”、“以前からの夢だったから”、“文庫を持つのが夢でした”、“何十年も昔、石井桃子さんのかつら文庫の活動を知って以来、いつかはそのような地域文庫を開くことを夢見ていまし

た”などがあつた。2000年以降に誕生した文庫の運営者の回答にも“自分の生まれ故郷に図書館を作りたい、というのが子どもの頃からの夢でした”、“子どもと本をつなぐ仕事を地域でしたかった。自宅を開放するのは、末子が15歳になったらと決めていた”などがあつた。

これらの運営者は、今日の前にいる我が子のためにやむにやまれぬ気持で文庫を始めたり、続けたりする母親ではない。いわば従来の文庫活動に価値観と想いを抱く者であろう。長年の夢を実現するための経済的、時間的な余裕を得て、準備万端に体制を整えて文庫を始めたことが、自分の意志でより自由に運営できる家庭文庫の設立の多さ、施設や蔵書の充実につながっていると考えられる。“ログハウス5坪+8坪。自分の退職金をつぎこんで作りました。紙芝居道場、研修室も一緒に”という記述もあつた。これは極端な例だが、まさに自分の第二の人生の場として文庫活動を始めようとする運営者の気概が感じられる。

文庫の活動を長くしている運営者についても、自分の子どもはすでに成長し、成人している。文庫を始めた当初は「我が子のために」という考えが主であつたとしても、現在は地域の子どものために、自分自身の喜びや生きがいのために、文庫の活動に関わり続け、長年の活動の蓄積、成果として施設や蔵書の充実を達成している様子もみられた。

現在は、いわゆる団塊の世代が社会の一線から退き、第二の人生を送る時期を迎える中で、自分の生きがいとして文庫の活動を始めている運営者もいる。

標本数が少ないため、明らかな傾向とは言い切れないが、年齢別に見た時、わずかではあるが高齢の男性の比率が高かつたのは（第10表）、仕事からリタイアしたシニア世代の男性が文庫に興味を持ち、活動に参加しようとしている兆しと考えられないだろうか。たとえば“女性では、若いお母さんたちが参加してもらえない傾向にあるが、男性では仕事をリタイアした人たちが数名入ってくれた”、“主人68歳、妻64歳の二人で運営している（主人が勤めている間（60歳まで）は専ら

妻）”という記述があつた。設問として特に設けなかつたが、家庭文庫の運営者に関する記述を読み取る中で「夫婦で文庫活動をしている」と判断できるものも複数あつた。珍しい例としては、70代の夫婦がそれぞれ自分のやりたい形で別々に文庫の活動をしているものもあつた。ずっと女性を中心であつた文庫活動の中に、少数ながら高齢の男性の姿がみえたのも今回の傾向といえるだろう。

第一の要素とは異なり、こちらは肯定的な要素であろう。多くの年輩者が次々と各職場からリタイアする中、運営者が高齢者中心となっていく傾向がより強くなるのは必然の流れであろう。

C. 文庫継続のさまざまな形

地域の施設を利用し、複数の運営者が協力して運営する地域文庫で活動を長く続けるためには、安定して場所を確保すること、新しい運営者への円滑な引き継ぎ、交代が行われることが必要である。本来個人的な運営である家庭文庫の活動は、運営者である主宰者の意志によるところが多く、高齢になれば物理的に閉庫せざるを得ない。こうした条件から既に述べたように文庫が長く継続することは難しいと思われてきた。しかし、今回の調査では、第2表で示したように1990年以前に設立した文庫が284件（53.8%）、つまり回答の半数以上の文庫が、20年以上継続して活動していることが分かつた。

この現象を、運営者の文庫歴と設立からの文庫の継続年との比較（第8表）と、文庫を運営する「人」に関する自由記述欄の内容から考える。調査結果では、運営者の文庫歴が継続年より短いものは、地域文庫の回答者の方が多かつた。通常複数の運営者が協力して運営している地域文庫では、家庭文庫よりも多く、頻繁に運営者が交代している。

家庭文庫の継続については、自由記述欄に“親から引き継いだ”、“亡くなった妻の文庫を続けた”、“手伝っていた家庭文庫の運営者が引越したので、丸ごとその活動を引き継いだ”などの説明があつた。本来は個人的な活動である家庭文庫

でも、親から子へ、妻から夫へ、友人から友人へ、という形で運営者の交代がなされ、活動が引き継がれている。

文庫歴が継続年より長いのは、回答者が現在の文庫以前に他の文庫の活動に何らかの形で関わっていたことを示す。どのような経緯で複数の文庫に関わっていたかについては、自由記述欄の“最初は利用者だったが、自分でもやりたくなかった”、“文庫のお手伝いをしているうちに楽しさを知り、家庭文庫を開いた”、“引っ越し先で他の文庫に関わるようになった”、“発足時は町内会集会所を利用（地域文庫として）していたが、1993年より自宅で開いている（家庭文庫）”などの記述があった。

「文庫の継続」で引き継がれる要素には「場所」、「本」、「精神」がある。この3つの要素は一体となって考えられることが多い。つまり、ある場所に設立された家庭文庫や地域文庫が場所を変えず、その文庫の独自の蔵書と運営方針を持って活動を続けるという形である。本研究でも、運営者が変わっても「同じ場所、蔵書、精神」で活動が継続されるという状況を「文庫の継続の形」と考えていた。しかしさまざまな例が具体的に示される中、この3要素の全てを備えていなくても、広い意味で文庫の継続の一形態とみなせる、と判断するに至った。

さらに“1976年から自宅の居間、1978年から敷地内に専用のプレハブ設置、当初は家庭文庫として活動していたが、代表者の病気により休庫。2002年に地域の集会所に移転して活動を再開。代表者もその後交代して現在に至る”というかなり複雑な変化を示す回答もあった。場所、運営者、代表者が変わっているが、回答者は一連の文庫活動として捉えている。

第一にあげた「場所」が引き継がれるということは、文庫の運営者、蔵書、あるいは精神が変化しても変わらず同じ場所で文庫活動が行われていることである。たとえば、横浜で1971年に設立された文庫は、同じ場所で活動を続けているが、40年近くの活動の中で、運営者が全て代わっている。またこの文庫は蔵書の大半が市立図書館か

らの団体貸出で構成されていて、蔵書構成、収書方針が変化していた。

第二にあげた「本」は、さまざまな文庫の継続を支える確実に大きな要素と思われる。“自宅で行っていた文庫を継続していくことが困難になったので、蔵書1000冊を新設の公民館に寄贈し、地域文庫として発足”、“友人の文庫が閉庫になったので、その本の移転先として始めた”、“家庭文庫をしているが、引っ越しが多い。全ての本を持っていくことはできず残していった本で友人が家庭文庫を始めた”などは、本が手渡されることによって、文庫の活動が継続する例である。

文庫の活動が本を中心に継続することについて、東京子ども図書館の荒井督子は、石井桃子のかつら文庫の蔵書が、長い年月を越えて多くの子どもに読まれていること、貸出カードに父母の名前を見つかる子どもがいること、文庫の本が世代を越えて共通する読書経験を提供していることなどをあげ、“すぐれた本の命の長さ、書架に置く意味”⁴⁰⁾を訴えている。さらに以下の文章は、ある文庫の本が時代と空間を越えて他の文庫に手渡され、活動を継続する原動力になっていることを示している。

「かつら文庫」の一代目のお姉さんの岸田節子さんの開いた大田区の「柿の木文庫」は、望まれて白河市の石村宮子さんに引継がれました。いぬいとみこさんの「ミュージカ文庫」は、益子の石川綾子さんの「マーシカ文庫」として生まれ変わり、いずれも地域の子どもたちに歓迎されています⁴⁰⁾。

松岡も、個人的に運営されている家庭文庫がある時期に終わるのは自然なこと、と述べた上で、“そういう形でなくなった文庫の本が別のところへ行って、文庫として活用されている例も沢山あります”として、上のミュージカ文庫、東京子ども図書館の母体となった土屋文庫、家庭文庫を長年営んだ瀬林杏子のせばやし文庫の本が、各地の文庫で引き継がれ、読まれていることを紹介している⁴¹⁾。

今まであげた第一、第二の要素の「場所」と「本」は、目に見える形で存在する。しかし第三の要素である「精神」は、はっきりと目に見えず、継承が難しい要素である。しかし何のために、どのように活動を行うのか、という文庫運営の基本的理念である精神が変わることは、文庫の本質、本来の活動の変質を意味する。

『子どもの図書館』⁶⁾は、1965年の刊行以来、文庫を始める動機を与え、継続を支える精神の要として認知されてきた。松岡はこの本の影響力の大きさは、石井が「大切なこと」をはっきりと平易に説得力のある言葉で読者に分かりやすく示しているためであると述べ、以下のように解説している。

その大切なことというのは、今日の複雑な社会で、人が人間らしく、しっかりと生きていくためには、子どものときに文字の世界にはいる必要があること、本はそのための「たのしい」道であり、同時に、子どもの精神世界を豊かにし、人間性を育むのに大きな力をもつこと、そして、子どもが自由に、質の良い本と出会える場を備えるのは大人の責任であること、等である⁴²⁾。

今回の調査でも文庫を始めた動機、文庫の活動や役割を尋ねる設問の自由記述欄などに石井の『子どもの図書館』⁶⁾についての言及が数多くあった。“石井桃子さんが大好きな娘が「かつら文庫のような文庫を」という思いから親子2人で活動しています。A市で始め、B市への引越しとともに文庫も一緒に引っ越しました”と記入した運営者もいた。この文庫の母親は40歳代、娘は10歳代で子ども部屋を開放して文庫活動を行っている。刊行から60年近く経った今もなお、幅広い世代にこの本の影響力が健在であることがわかる。

さらに文庫継続の形として「人」という要素を中心とする継続の事例もみられた。これは同一人物が文庫の場所や蔵書を変えながら、活動をしていく形である。具体的には“C市からD市に

転居で文庫も移転した”、“E市(居間)→F市(食堂と居間を開放)→G市(食堂)→H市(一室専用)→F市(一室専用)と異動”、“バス文庫をしていたが廃車バス老朽化のため家庭に入れ個人の家の自宅で”、“I市にいたときに発足し、J市に居た時は自宅で1年開き、K市でも12年間開いた。今はL自治公民館の1室を借りている”など、ある運営者が引っ越しなどで転々と住居を変えても、新しい土地で新しい文庫を始める、家庭文庫の場を地域文庫に移す、あるいはその逆といったものである。特に文庫の形態が変わる事例が多かった。この場合文庫を運営する精神は、運営者自身の活動への信念であるため、変わらずに保持されているといえよう。

V. 運営者の意識と姿勢

現在文庫の活動に携わっている人は何を動機に文庫を始め、何を理由に活動を続けているのか。今回の調査では、活動に取り組む運営者の意識と姿勢を明らかにするために、1993年調査よりもさらに詳細に文庫を始めた動機と、活動を続けている理由を尋ね、その結果を検証した。ここでは、運営者の意識に関する設問への回答と、「その他」の自由記述欄に書かれた内容について述べる。

A. 不変の意識と姿勢

集計した結果のうち「動機」と「理由」双方で回答数が多く順位が高いものは、運営者の意識の中で「強く」かつ「変わらない」要素であると考えた。運営者が文庫を始めた時から現在に至るまで変わらず持ち続けている信念、意識ともいえる。

双方で回答数が多く高順位だった「子どもの本が好き」(選択肢2)、「子どもが好き」(選択肢1)、「お話や読み聞かせをするのが好き・楽しい」(選択肢3)、「子どもに自分の好きな本を手渡すのが好き・楽しい」(選択肢4)からは、「子どもの本」、「子ども」、「本を手渡すこと」を好きだ、大切だと想う気持ちが現在の運営者が文庫の活動を続ける中で保っている不変の要素であるといえる(第11表)。

B. 変化した意識と姿勢

次に、文庫活動に取り組む意識の中で変化があったものについて考察する。「動機」と「理由」の順位之差が4以上と大きいものは、「自分の子の読書環境の充実のため」(選択肢5)、「子どもの学校、友人の関係」(選択肢8)、「仲間や友人とのつながり」(選択肢10)、「地域活動の一環、必要性」(選択肢11)、「近隣の読書施設の有無」(選択肢14)だった。

運営者の意識や姿勢の変化を個々に比較したものでなく、全体数としての判断にはなるがこの順位の差を意識の変化と捉えた場合、その理由もしくは背景について以下の様な仮説が考えられる。

① 読書環境、読書施設の充実による読書環境以外への視野の拡大

「自分の子の読書環境の充実のため」(選択肢5、動機:「自分の子の読書環境を充実させたかったから」、理由:「自分の子の読書環境を充実させたいから」)が6位から12位に、「近隣の読書施設の有無」(選択肢14、動機:「近くに図書館などの読書施設がなかったから」、理由:「近くに図書館などの読書施設がないから」)が5位から9位に順位が変化したのは、読書施設や読書環境が充実、整備されたことにより、運営者の視野が読書環境や読書施設以外のものへと広がったからである。

② 自主的な意識の誕生、文庫活動の楽しさの発見

「子どもの学校、友人の関係」(選択肢8、動機:「子どもの学校や友人の関係から誘われたから」、理由:「子どもの学校や友人の関係があるから」)が9位から14位に変化したのは、文庫の活動に参加する意識や姿勢が、義務感からより自主的なものになったためである。また「仲間や友人とのつながり」(選択肢10、動機:「仲間や友人がほしかったから」、理由:「仲間と一緒にいるのが楽しいから」)が13位から6位に変化したのは、活動を仲間と共有する喜び、文庫の楽しさを発見したためである。差は3であるが選択肢7の「文庫での経験の楽しさ」(動機:「過去の文

庫利用経験が楽しかったから」、理由:「文庫の楽しさを他の人に伝えたいから」)が11位から8位になったのは、発見した文庫の楽しさをより広く伝えていきたいという気持ちに発展したものと考えられる。

③ 社会的・公共的な視野、意識の誕生

「地域活動の一環、必要性」(選択肢11、動機:「地域活動の一環として」、理由:「地域で文庫の活動が必要だと思うから」)が7位から3位に変化したことから、活動を通して、社会的視野や意識が誕生し、さらに一市民としての自覚が高まった様子がうかがわれる。

①の読書環境、読書施設の充実で述べた「自分の子の読書環境の充実のため」の変化は、こちらの「社会的視野、意識の誕生」が理由であるともいえるだろう。活動の対象が「自分の子どもに」という限定的なものから、「子どもに」と公共性が高いものに変化している。また前章で示した文庫の運営者の高齢化もこの公共性、社会的視野と関連しているといえよう。

C. 「その他」の自由記述にみられた意識と価値観

「その他」の選択数は、動機156件、理由100件だった。こちらは予め想定した動機、理由以外の運営者の意識であり、自由記述欄に具体的に記入してもらった。その内容を検証し、活動を支える運営者の意識を16の要素に区分した。以下それぞれの要素を代表的な記述とともに示す。

① 読書を通して子どもの成長を見守る喜び

“子供が成長していくのが嬉しい。利用者だった子が現在スタッフのお兄さんに”、“子どもが変わっていくのが楽しい”、“赤ちゃんからの成長が楽しみだから”など。

② 子どもと出会う・子どもと一緒に本を楽しむ場

“子どもとふれ合う機会が欲しいから”、“子どもが喜んでくれて友達になれる。子どもとのいい関係が嬉しい”、“子どもからパワーをもらっている”など。

③ 子どもの居場所・子どもが自由にくつろげる場

“子どもの居場所としての役割”，“禁止事項の多い子どもたちに，少しでものびのびとできる空間を作れたかった”，“遊びの空間に読書の場を設けたかった”など。

- ④ 異年齢・異世代の交流の場
“本を仲立ちに異年齢同士の交流や話し合いの場を設けたかった”，“子どもを中心に大人たちの輪を拡げ，昔の大人と子供の間を取り戻したい”など。
- ⑤ 人との出会い・つながり・拡がり
“仲間や子どもとの出会いの中で本の世界が広がっているから”，“利用者との交流が楽しく情報交換の場としての役割も担っているから”，“転勤族でも続けられたし，行く先々で新しい出会いがあったから”，“つながりができるとやめられない”など。
- ⑥ 文庫を引き継ぐ・利用者から運営者へ
“亡き夫の夢でした”，“友人の文庫が閉庫になったのでその本の移転先として始めた”，“父から受け継いだ”，“息子2人が文庫でお世話になりました。絵本のおばあちゃん（現在95歳）のお手伝いをするうち，跡継ぎに”，“夫の母が一人で開いていたのを地域の有志と引き継いだ”，“開設した友人が死亡し，誰かが続けなければならなかったから”，“子どもが文庫でお世話になり，文庫の大切さを実感したから”など。
- ⑦ 若い親のバックアップ
“若い親御さん達の友達づくりの場，居場所として”，“乳幼児とその親を支援したい”，“親が子どもと一緒に本を選んで欲しかったから”，“親が子どもに読み聞かせをして育てたい”など。
- ⑧ 子育てからの拡がり
“自分の子育ての中で親子読書を立ち上げて”，“自分の子どもに同じ年頃の友達が欲しかったから”など。
- ⑨ 自分の本を活かす・共有する場
“所有している本がもったいないから”，“阪神淡路大震災の時集まった全国からの義援本を避難所解散後も活かしたくて始めた”，“ユ

ネスコライブラリー100で本を100冊いただいたから”，“集めた本が活かせる，活用されることが嬉しいから”など。

- ⑩ 自分の経験を活かす場
“学校司書として16年勤務した職歴と蔵書を生かしたかった”，“児童福祉職員として働いた延長で，子どもに遊ぶ場所を提供したかった”など。
- ⑪ 講座や研修を契機に
“公民館で語りと読み聞かせの講座を受け，終了後も勉強を続けることになったから”，“読み聞かせ養成講座を企画・運営したことから”など。
- ⑫ 自分の居場所・自分の世界を広げる場
“社会への窓口としたかった”，“孤独な自分自身を癒すため”，“本が好きで文庫の空間が落ち着くから”，“退職後の移転だったので，地域に馴染む手段として文庫を開いた”など。
- ⑬ 『子どもの図書館』⁶⁾の影響・夢の実現
“石井桃子さんの家庭文庫に憧れていたから”，“『子どもの図書館』を読んで，長年文庫を開きたいと思っていたから”，“文庫を持つのが夢でした”，“生まれ故郷に図書館を作りたいというのが子どもの頃からの夢でした”など。
- ⑭ 生活の一部・ライフワーク
“長く続けていて生活の一部になっている”，“自分の生活時間の中に組み込まれ，文庫をするのが自然だから”，“生きることにつながる”など。
- ⑮ 文庫ならではの役割・使命感
“使命！”，“図書館とは違う文庫の存在意義が見えてきたような気がするから”，“文庫には学校や図書館とは違う役割があると思うから”，“子どもを育てることは，大人の責任だから”など。
- ⑯ 義務感・責任
“自治会の担当職務”，“幼稚園の役員として文庫を維持していかなければならないから”，“後任の代表として適任者が現れないか

ら”など。

第12表では、これら16の要素を内容によって4つの概念にまとめた。

概念1の「子どもとのつながり」は、文庫が子どもにとってどのような場所かの認識、文庫の活動を通した子どもと自分とのつながりを述べた意識である。概念2の「他者とのつながり」は、文庫の活動に関わる利用者、他の運営者と自分とのつながりを述べた意識である。概念3の「自分の生き方」は、文庫の活動を成り立たせている自分自身の経験、意識、希望、所有する本について述べた意識である。概念4の「文庫の役割の認識、運営者としての自覚」は、社会における文庫の存在価値、使命の認識、文庫の運営者として活動に関わる意味、自分自身にとっての文庫とは何かについて述べた意識である。

D. 活動の継続を支える運営者の意識

AおよびB節で述べた「不変の意識と姿勢」、
「変化した意識と姿勢」は、既定の選択肢から回答者が何を選んだかという結果から見出した全体的な傾向であり、C節で述べた「その他」の自由記述にみる運営者の意識、価値観は、回答者が選択肢にはないと判断し、「その他」として自由記

述欄に書いた記述を整理・分類して見出した運営者の文庫に対する意識、価値観である。ここでは双方の関係と意識の全体像について述べる。

第13表は、A節、B節で説明した現在の運営者の「不変で強い意識」と「変化の見られた意識」を示したものである。

第1図では、C節で区分した4つの概念およびそこに含まれる16の要素の関係、要素間の関連性、位置づけなどを考慮して配置し、図示した。運営者の意識の中には「子どもとのつながり」、「自分の生き方」、「他者とのつながり」があり、これら3つの概念の相互関係の中で「文庫の役割の認識、運営者としての自覚」すなわち文庫ならではの役割、使命の発見と認識が生まれ、生活の一部、ライフワークとして活動を継続しようという意識が芽生えたと考えた。

第13表中の「不変で強い意識」とした「子ども、子どもの本、子どもの本を手渡すことが大切だと思ふ気持ち」は、第1図の「子どもとのつながり」、「自分の生き方」という概念と密接に関わる。この「不変で強い意識」は、文庫の活動を始めた時から個々の運営者を支えていると同時に、継続への新たな意識、力を生む原動力にもなっている。「変化の見られた意識」のうち、順位が高

第12表 自由記述に見られた文庫の活動を支える意識

概念 (4)	要素 (16)
1 子どもとのつながり	① 読書を通して子どもの成長を見守る喜び ② 子どもと出会う・子どもと一緒に本を楽しむ場 ③ 子どもの居場所・子どもが自由にくつろげる場 ④ 異年齢・異世代の交流の場
2 他者とのつながり	⑤ 人との出会い・つながり・拡がり ⑥ 文庫を引き継ぐ・利用者から運営者へ ⑦ 若い親のバックアップ ⑧ 子育てからの拡がり
3 自分の生き方	⑨ 自分の本を活かす・共有する場 ⑩ 自分の経験を活かす場 ⑪ 講座や研修を契機に ⑫ 自分の居場所・自分の世界を広げる場 ⑬ 『子どもの図書館』の影響・夢の実現
4 文庫の役割の認識運営者としての自覚	⑭ 生活の一部・ライフワーク ⑮ 文庫ならではの役割・使命感 ⑯ 義務感・責任

第13表 不変の意識と変化の見られた意識

	順位 (動機)(理由)	内容	現在の意識	
不変で強い 意識 (共に高順位)	1→1	(動機・理由) 子どもが好きだから	子どもが	好きだ ・ 楽しい ・ 大切だ
	2→2	(動機・理由) 子どもの本が好きだから	子どもの本が	
	3→4	(動機) お話や読み聞かせをするのが好きだから (理由) お話や読み聞かせをするのが楽しいから	本を手渡す ことが	
	4→5	(動機) 自分の好きな本を子どもに手渡したかったから (理由) 自分の好きな本を子どもに手渡せるから		
変化の理由・現在の意識				
変化の見られた 意識 (順位差4以上)	6→12	(動機) 自分の子の読書環境を充実させたかったから (理由) 自分の子の読書環境を充実させたいから	読書環境、読書施設の充実による 読書環境以外への視野の拡大	
	5→9	(動機) 近くに図書館などの読書施設がなかったから (理由) 近くに図書館などの読書施設がないから		
	7→3	(動機) 地域活動の一環として (理由) 地域で文庫の活動が必要だから	社会的、公共的な視野、意識の誕生 一市民としての自覚の誕生	
	9→14	(動機) 子どもの学校や友人の関係から誘われたから (理由) 子どもの学校や友人の関係があるから	義務感からの変化 自主的な意識の誕生 活動を共有する喜び 文庫の楽しさの発見	
13→6	(動機) 仲間や友人がほしかったから (理由) 仲間や友人と一緒にいるのが楽しいから			

くなったものについては変化の理由として、「活動を共有する喜び」、「文庫の楽しさの発見」、「社会的な視野、意識の誕生」、「一市民としての自覚」をあげた。運営者が活動が続ける中で、新たに文庫の楽しさ、価値を発見し自覚したと考えたからである。この「変化の見られた意識」は、第1図の「他者とのつながり」、「自分の生き方」、「文庫の役割の認識、運営者としての自覚」の概念中にある要素と重なる。

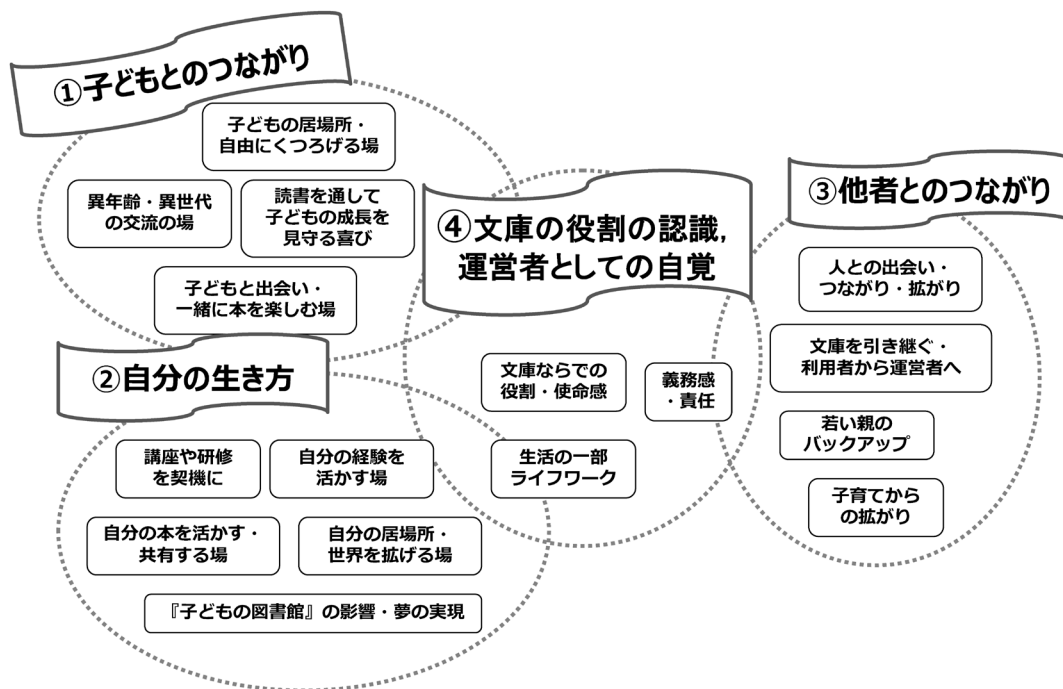
運営者が潜在的に持っている意識である子どもへの愛情、子どもの本に対する信頼を、文庫の活動を続ける中で強化し確信へと変化させること、同じ活動を共にする他者とのつながりを通して、社会的、公共的な視点での文庫の使命や価値観を自覚することが活動の継続を支えている、といえるのではないだろうか。

VI. ま と め

家庭を主として始まった戦後の文庫は、急速な活動の普及と利用の増大の流れの中で、個人から集団での運営へと変化し、組織化されていった。今回の調査結果から、現在は家庭文庫が全体に占める割合が増加しつつあることが分かったが、運営者の構成は戦後の家庭文庫とは明らかに異なっている。

自宅という最も個人的な場所を不特定多数の人に開放する家庭文庫への重心の移行は、核家族化、地域社会における人的な繋がりやコミュニケーションの希薄化、さまざまな犯罪や事件の増加により、他者に対する警戒心がより強くなる傾向にある今の社会の動きに一見すると逆行しているように見えるのも、注目すべき事象である。

高齢化という社会構造の変化の中、退職後も何



第1図 文庫の活動を支える意識

かの形で社会に参加しようとする意識が男女ともに高くなっていることも、現在および将来の文庫の活動に影響を与えることがうかがわれる。他の子どもを対象とした読書推進活動、ボランティア活動と文庫活動の相違を明らかにし、独自性を示すためには、多種多様な形で存在する社会参加の選択肢の中で、現在のそして未来の運営者がなぜ文庫の活動を選んだのか、選ぶのかについて、今回の考察をもとに、さらに論を深めていくことが必要であろう。

本稿では、文庫の継続で引き継がれる要素には「場所」、「本」、「精神」があること、特に本が継続の大きな要素となることを明らかにした。同じ運営者が場所を変えて文庫を継続させていく様子も「人」という要素として示した。現在多くの文庫の活動は、当初の子どもが本に出会う空間を提供する、という素朴な形ではなくなっているが、文庫には本があり、本との出会いがあり、本の魅力を次の世代である子どもや仲間に伝えたい、共

有したいという想いがある。文庫の継続を「本」中心に捉えていく視点は重要と考える。

さらに、文庫を始めた動機と続けている理由の選択の分析からは、「子ども」「子どもの本」「本を手渡すこと」が好きだ、大切だと思う気持ちだが、文庫の活動を支える不変で重要な意識であることを示した。しかし文庫が長く存続する間に、運営者自身の経験や知識も変化していることをも考慮しなくてはならない。たとえば双方で1位であった「子どもの本が好きだから」に関しては、戦後初期の文庫の運営者と現在の運営者では、それぞれの児童書に関する経験値が異なる。日本で本格的な児童書の出版の取り組みが始まったのは1950年代であり、現在公立図書館などで読み継がれている多くの児童書は、戦後間もなく文庫を始めた運営者にとって当時、未知未読の本だった。当初の文庫運営者は、文庫の活動を通して初めてこれらの本に出会い、その楽しさを知り、子どもに伝える重要性を認識していく。親子が共に

本を読み、大人という立場から児童書の楽しさを発見していく時代であったといえるだろう。

この設問への回答から「不変で強い意識」, 「変化のみられた意識」を見出し, その理由, 背景を考察した。自由記述から運営者の意識を構成する16の要素を見出した。さらにこの16の要素を4つの概念に分け, 「子どもとのつながり」, 「自分の生き方」, 「他者とのつながり」, の相互関係の中で「文庫への想い」すなわち文庫ならではの役割, 使命の発見と認識が生まれ, 生活の一部, ライフワークとして活動を継続しようという積極的な意識が芽生えたと考えた。

今回は, 質問紙調査から, 主として文庫の重要な要素である運営者に関する結果を抽出し, 文庫の現状と関連づけた考察を行った。特に, 現在の運営者の意識, なぜ文庫の活動を選んだのか, なぜ継続しているのかについて主として量的な面から全体的な検証を行った。今後は, 現在の文庫の継承の姿, 文庫の将来をより明らかにするために, 過去の運営者と現在の運営者の経験値の違いなども考慮し, 質的な分析を加えた検証を行う。加えて, 今回対象外とした利用や貸出などの文庫の活動, 選書や蔵書構成, お話会や行事, 対外的な活動, 関連団体や地域社会との関わりの現状と変化を明らかにする。さらに文庫の役割, 地域社会における役割についての自由記述に関する質的な検証も行う。

最終的には戦後の子どもを対象とした読書の取り組みという動きの中での文庫の誕生, 発展, 普及, 継続の形およびその背景を, 現在の運営者の活動と意識から捉え, 文庫の活動の独自性と本質を明らかにすることを, 今後の課題としたい。

謝 辞

執筆にあたり, 質問紙調査にご協力いただいた全国の文庫運営者の方々, 伊藤忠記念財団, 児童図書館研究会をはじめ, 文庫の情報を提供して下さったみなさま, ご指導をいただいた慶應義塾大学の土田修一名誉教授, 田村俊作教授に深く感謝いたします。また査読者には多くの貴重なご意見をいただきました。御礼申し上げます。なお本研

究は, 平成22年度三田図書館・情報学会助成金の助成を受けて行いました。

注・引用文献

- 1) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学会用語辞典, 第3版, 丸善, 2007, 286 p.
- 2) 清水正三. 私の文庫観. 季刊子どもの本棚. 1976, no. 19, p. 146-149.
- 3) 全国子ども文庫調査実行委員会編. 子どもの豊かさを求めて3: 全国子ども文庫調査報告書. 日本図書館協会, 1995, 118 p.
- 4) 高橋樹一郎. “子ども文庫”. 新・こどもの本と読書の事典. ポプラ社, 2004, p. 135-136.
- 5) 吉田右子. 1960年代から1970年代の子ども文庫運動の再検討. 日本図書館情報学会誌. 2004, vol. 50, no. 3, p. 103-111.
- 6) 石井桃子. 子どもの図書館. 岩波書店, 1965, 218, 15 p. (岩波新書, 青版559).
- 7) 島弘. “子ども文庫の現在: 1992~1997”. 年報こどもの図書館. 1998年版, 児童図書館研究会編. 日本図書館協会, 1998, p. 206-214.
- 8) 末廣いく子. “子ども文庫の特色〈その多様性〉”. 子どもの豊かさを求めて: 全国子ども文庫調査報告書. 全国子ども文庫調査実行委員会編. 日本図書館協会, 1984, p. 37-53.
- 9) 児童図書館研究会編. 年報こどもの図書館: 1981年版. 日本図書館協会, 1981, 421 p.
- 10) 読書推進運動協議会編. 2008年度全国読書グループ総覧: 読書会・文庫・実演グループ・研究会・連絡会など. 読書推進運動協議会, 2009, 311 p. こちらの文献では文庫の数は1,142だったが, 後に1,143に修正されている。http://www.dokusyo.or.jp/gsouran/08sourantrue.pdf (2013.3.15参照)。なお, 読書推進運動協議会の調査結果は1971年版より概ね5年の間隔で出版されているが, 文庫数が明示されているのは1998年版以降である。
- 11) 広瀬恒子. 文庫活動の10年. 1979, 月刊社会教育. vol. 23, no. 13, p. 58-64.
- 12) 小河内芳子編. 子どもの図書館の運営. 日本図書館協会. 1986, 283 p.
- 13) 小河内芳子. 思いつくままに. 小河内芳子(私家版). 1986, 102 p.
- 14) 松岡享子. 子どもの図書館を考える. 図書館界. 1974, vol. 25, no. 5/6, p. 164-170.
- 15) 松岡享子. 「民」としての文庫の役割. 大阪国際児童文学館を育てる会会報. 2006, no. 85, p. 1.
- 16) 日本図書館協会公共図書館部会児童図書館分科会編. こども図書館の手引. 日本図書館協会, 1959, 75 p.

- 17) 汐崎順子, 小河内芳子: 児童サービスのパイオニア. *Library and Information Science*. 2008, no. 60, p. 29-60.
- 18) 松岡享子. こども・こころ・ことば: 子どもの本との二十年. こぐま社, 1985, 234 p.
- 19) 国立国会図書館館長対談. *国立国会図書館月報*. 2009, no. 585, p. 4-13.
- 20) 赤星隆子. 児童図書館の誕生. 理想社, 2007, 287, 7 p.
- 21) Carnegie, Andrew. *Autobiography of Andrew Carnegie*. 1920, xii, 375 p. Constable & Co. Ltd.
- 22) 日本図書館協会マウル文庫調査研究会臨時委員会編. マウル(村落)文庫調査研究報告書. 日本図書館協会, 1987, 180 p.
- 23) 日本図書館協会公共図書館部会児童図書館分科会編. 日本の児童図書館1957: その貧しさの現状. 日本図書館協会. 1958, 46, 9 p.
- 24) 児童図書館研究会編. 年報こどもの図書館. 1969年版, 児童図書館研究会. 1970, 111 p.
- 25) 児童図書館研究会編. 年報こどもの図書館. 1975年版, 日本図書館協会. 1976, 158 p.
- 26) 高橋樹一郎. “子ども文庫活動”. 年報子どもの図書館: 2007-2011. 2012年版, 児童図書館研究会編. 日本図書館協会, 2012, p. 154-159.
- 27) 松岡享子. 文庫発展のあとをふりかえって. 現代の図書館. 1979, vol. 17, no. 2, p. 114-116.
- 28) Hotta, Miyoko. *Children, Books, and Children's BUNKO: A Study of an Art World in the Japanese Context*. University of California at Berkeley. 1995, Ph.D. thesis.
- 29) 児童図書館研究会編. 年鑑こどもの図書館. 1958年版, 児童図書館研究会. 1958, 118 p.
- 30) 児童図書館研究会編. 年鑑こどもの図書館. 1963年版, 日本図書館協会. 1964, 139 p.
- 31) 日本図書館協会編. 地域家庭文庫の現状と課題: 文庫づくり運動調査委員会報告. 日本図書館協会. 1972, 69 p.
- 32) 親子読書地域文庫全国連絡会編. 親子読書・地域文庫全国連絡会実態調査. 親子読書地域文庫全国連絡会. 1979, 92 p.
- 33) 全国子ども文庫調査実行委員会編. 子どもの豊かさを求めて: 全国子ども文庫調査報告書. 日本図書館協会. 1984, 59 p.
- 34) 親地連十五周年記念実行委員会編. 親地連の十五年. 親子読書地域文庫全国連絡会. 1985, 152 p.
- 35) 全国子ども文庫調査実行委員会編. 子どもの豊かさを求めて2: 全国子ども文庫調査報告書. 日本図書館協会. 1989, 40 p.
- 36) 読書推進運動協議会編. 全国読書グループ総覧. 1998年版, 読書推進運動協議会. 1999, 231 p.
- 37) 高橋樹一郎. 子どもBUNKOプロジェクト報告書. 伊藤忠記念財団. 2006, 261 p.
- 38) 読書推進運動協議会編. 2003年度全国読書グループ総覧: 読書会・文庫・実演グループ・研究会・連絡会など. 読書推進運動協議会. 2004, 223 p.
- 39) 厚生労働省. 働く女性の実情. 平成23年版, 2011. <http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/11.html>. (入手2013-3-31).
- 40) 荒井督子. かつら文庫の原点から. こどもの図書館. 2005, vol. 52, no. 10, p. 1.
- 41) 広瀬恒子他編. これからの子ども・本・人 出会いづくり: 記念対談松岡享子・広瀬恒子. 親子読書地域文庫全国連絡会. 2008, 66 p.
- 42) 松岡享子. “解説『子どもの図書館』の驚くべき浸透力”. 新編子どもの図書館. 石井桃子著. 岩波書店, 1999, p. 289-301. (石井桃子集, 5).

要 旨

【目的】 文庫は日本独自の私的な児童図書館的活動であり, 第二次世界大戦後, 急速に拡がり全国各地に定着した。本稿はこの文庫の運営の現状, および運営者の意識を明らかにすることを目的としている。

【方法】 2010年5月に全国の文庫を対象に質問紙調査を実施し, 528件の有効な回答を得た。この結果を分析して文庫の運営の現状と運営者の意識を量的・質的に明らかにした。

【結果】 文庫は減少の傾向にあり, 運営者の高年齢化と少人数化が進んでいる。これは家庭文庫を中心とした施設と蔵書の充実と関連している。また調査結果の検証から, 文庫の活動を行う場所, 文庫の本, 運営の精神が必ずしも一体としてではなく, 各要素が部分的に単独で引き継がれるのも文庫継続の一つの形であることが分かった。とりわけ本は継続を支えるための重要な要素であった。加えて同一の運営者が場所を変えて文庫を継続させている様子も明らかになった。文庫を始めた動機と続け

日本の文庫：運営の現状と運営者の意識

ている理由を尋ねる設問への回答からは、「子どもの本」、「子ども」、および「本を手渡すこと」が好きだ、大切だと思う気持ちが、継続した活動を動機づけている不変の意識であることが分かった。さらに運営者の意識として16の要素を見出し、「子どもとのつながり」、「自分の生き方」、「他者とのつながり」、「文庫の役割の発見、運営者としての自覚」の4つの概念に分類した。

付録

2010 汐崎親子

文庫へのアンケート調査・記入用紙

回答日: 2010年()月()日 (本用紙に記入した月日をお書きください)

記入にあたってのお願い
 選択する設問では、該当する項目の□に○や★などで印をつけてください。(例: □、因)
 記入欄 ()には具体的な内容を記入してください。
 該当しない設問、答えにくい設問はそのままにして結構です。書けるところにご回答ください。
 *内容や書き方などについてご不明な点やご質問がありましたら、汐崎までご連絡ください。
 Tel/Fax: ***-***-**** e-mail: shio-j@***.****

① 文庫名・所在地・発足年などについての質問

1. 文庫名・所在地(市区町村まで)・発足年をお書きください

名称 ふりがな		市区町村* *市区町村は、該当するものを○で囲んでください
所在地	都道府県	
発足年	昭和 平成 西暦	年

2. 文庫を開いている場所はどこですか？

個人の家、敷地内
 ↳ 具体的に教えてください。

個人の家以外
 ↳ その場所はどこですか？

公民館 公民館以外の公の施設 () 児童館 学校 教会・寺社
 町内会・自治会などの施設(集会所など) マンション・団地などの施設(集会所など)
 その他 ()

↳ 使用料はかかりますか？
 かかる () 円/年 かからない

その他 ()

2010 汐崎親子

② 記入している方への質問
 *このページの設問に関しては、記入している方個人のお考えをお書きください。

1. あなたは文庫の活動に何年ぐらいい関わっていますか？ 現在の役割(立場)は何ですか？

約 _____ 年

↳ 文庫での役割(立場)は何ですか？
 主宰者 代表者・事務局 世話人 その他 ()

2. 文庫の活動に携わるようになった動機は何ですか？ … 5 つまで選んでください

子どもが好きだから
 子どもの本が好きだから
 お話や読み聞かせをするのが好きだから
 自分の好きな本を子どもに手渡したかったから
 自分の子の読書環境を充実させたかったから
 自分を文庫で活かしたかったから
 過去の文庫利用経験が楽しかったから
 子どもの学校や友人の関係から誘われたから
 町会など地域の関係から誘われたから

仲間や友人がほしかったから
 地域活動の一環として
 ボランティアの活動に参加したかったから
 図書館や行政から呼びかけがあったから
 近くに図書館などの読書施設がなかったから
 その他 ()

3. 文庫の活動を続けている理由は何ですか？ … 5 つまで選んでください

子どもが好きだから
 子どもの本が好きだから
 お話や読み聞かせをするのが楽しいから
 自分の好きな本を子どもに手渡せるから
 自分の子の読書環境を充実させたいから
 文庫はやりがいがあるから
 文庫の楽しさを他の人に伝えたいから
 子どもの学校や友人の関係があるから
 町会など地域の関係があるから

仲間と一緒にいるのが楽しいから
 地域で文庫の活動が必要だと思うから
 ボランティアの活動を続けたいから
 図書館や行政からの要望があるから
 近くに図書館などの読書施設がないから
 その他 ()

4. 今後も文庫の活動を続けようと思っていますか？

思っている 思っていない 分からない

5. 自由記入欄
 *近年公民館図書館の数は増加し、一方で少子化が進んでいると言われています。その中で文庫の活動や役割について、あなたはどう考えますか？ お考えを自由に書きください。

2010 汐崎順子

F. お話会や行事

1. 文庫でお話会などをしていますか？

- している
- していない
- ↳ その内容は何ですか？
 - * 該当するもの全てを選んでください。
 - * 該当するもの全てを選んでください。
 - お話はなし
 - 読書会
 - ブックトーク
 - 手遊びやわらべ唄
 - 科学遊び
 - その他 ()

2. 年中行事や催し物の企画・開催をしていますか？

- している
- していない
- ↳ その内容は何ですか？
 - * 該当するもの全てを選び、催し物では頻度(回数)をお書きください。
 - クリスマス会
 - ひなまつり会
 - 人形劇(年に__回数)
 - 映画会(年に__回数)
 - 遠足や野外活動(年に__回数)
 - その他 ()

3. 文庫日より、通信の発行をしていますか？

- している(年に__回数)
- していない

4. 文庫から関係の施設に出かけていく活動(出前お話会など)をしていますか？

- している
- していない
- ↳ 出かける場所・頻度・内容はどうか？ * 該当するもの全てを選び、頻度・内容もお書きください。
 - 幼稚園・保育園 (月/年に__回数) 内容: ()
 - 小学校 (月/年に__回数) 内容: ()
 - 中学校 (月/年に__回数) 内容: ()
 - 図書館 (月/年に__回数) 内容: ()
 - 児童館 (月/年に__回数) 内容: ()
 - その他 ()

* 「出かけていく活動」について気づいたこと、気になっていることなどがあったらお書きください。
 記入例：某近、小学校の帰りの時間での読書会を開催した」「ブックスタート関係の活動が増えた」など

2010 汐崎順子

2. 年間の貸出冊数はどのくらいですか？(貸出をしている場合)

* おおよそその数で結構です。子どもの本以外(一般書)も貸出している場合はそちらもお書きください。

子どもの本 1年間に 冊

子どもの本以外 1年間に 冊

3. 1回(1日)あたり、どのくらいの子どもの本が利用されますか？

1~10人 11~20人 21~50人 51~100人 101人以上

E. 文庫の本

1. 文庫に置いている本は何冊くらいですか？

* おおよそその数で結構です。子どもの本以外(一般書)も置いている場合はそちらもお書きください。

子どもの本 冊

子どもの本以外 冊

2. 文庫に置いている本の内訳についてお書きください

* わかる範囲で結構です。貸出者・借書者などは差しさわりのない範囲でお書きください。

購入	個人の資金・会費などで買った本(助成者:)	約	冊
借用	助成金などで買った本(助成者:)	約	冊
借入	図書館から団体貸出などで借りた本(図書館名:)	約	冊
寄贈	図書館以外から借りた本(貸出者:)	約	冊
	もらった本(借書者:)	約	冊

3. 図書館から団体貸出を受けていますか？

受けている 受けていない

↳ 冊 ヶ月 の貸出

↳ 借りる本はどのように選びますか？

- 文庫側で自由に選ぶ
- 図書館側ですべて用意している団体貸出用のセットを借りる
- 図書館の職員と相談して一緒に選ぶ
- その他 ()

4. 文庫に置く本を選ぶ時、参考になっていることは何ですか？ ...主なものを3つまで選んでください

- 文庫の運営に携わっている人の意見
- 仲間同志の情報交換・推薦
- 子どもの要求
- 本のテーマ・内容
- ブックリスト ()
- 再評価や新刊案内
- その他 ()

G. 学習活動、ほかの文庫・図書館・図書関係団体との交流

1. 文庫の運営に携わる人の学習活動(子どもの本・読書についての勉強など)をしていますか？

- している
- していない
- ▶ その内容は何ですか？
 - ▶ 該当するものを全て選び、差しさわりなければ、最近(1年以内程度)の内容を具体的に書きください。
 - 自主的な内部の勉強会・学習会などの開催 ()
 - 外部が開催している研修会・講習会などへの参加 ()
 - 子どもの本・読書関係の講演会などへの参加 ()
 - その他 ()

2. 地元(文庫)連絡会や読書関係の連絡会に入会していますか？

- している
- していない
- ▶ 連絡会名をお書きください。
*複数の時は全てをお書きください。

3. 文庫の運営に携わる人の中に、図書館や読書関係の会、団体に入会している方がいますか？

- いる
- いない
- ▶ どのような会や団体に入会していますか？ *わかる範囲で該当するものを全て選んでください。
- 親子読書・地域文庫全国連絡会 東京都子ども図書館 日本国際児童図書館評議会(JIBBY)
- 日本子ども本の本研究会 児童図書館研究会 日本図書館協会 図書館問題研究会
- その他 ()

H. 運営の経費

1. 文庫を運営する経費は1年間にどのくらいかかりますか？

- ~1万円 ~5万円 ~10万円 ~15万円 ~20万円 ~30万円
- ~40万円 ~50万円 50万円以上
- ▶ そのうち本を購入する費用はどのくらいの割合ですか？

約 割

2. 経費はどのように払っていますか？

- ①自費 ②会費 ③パトナーや商品回収 ④助成金や補助金 () から (円)
- ⑤寄付金 () ⑥その他 ()
- ▶ そのうち主となっているものは何ですか？
該当するものの数字 ①~⑥) をお書きください。

④ 公共図書館・行政との関わりについての質問

1. 文庫の近くに公共図書館がありますか？

- ある
- ない
- ▶ 文庫の活動で図書館を利用する時、感じていることをお答えください。*該当するものを選んでください。
- 【施設について】... 満足 やや満足 どちからでもない やや不満 不満
- 【資料について】... 満足 やや満足 どちからでもない やや不満 不満
- 【職員について】... 満足 やや満足 どちからでもない やや不満 不満

2. 図書館や行政(市長・教育委員会など)に対して働きかけをしたことがありますか？

- ある
- ない
- ▶ どのような働きかけをしましたか？
- 文庫への援助や協力に関する事 図書館の充実に関する事(施設・資料・職員など)
- 図書館の運営に関する事(委託・指定管理など) 地域の読書環境に関する事
- その他 ()

*「図書館・行政との関わり」について気づいたこと、気になったことなどがあつたらお書きください。
記入例「図書館が委託になってから、文庫の活動への対応が良くなった(悪くなった)など」

⑤ 自由記入欄

* 文庫の現在、今後の展望などについてお考えをご自由にお書きください。
本調査に関するご意見などもごちらにお願ひします。

* 下は必須ではありません。もし差しさわりなければ、ご連絡先などをお知らせください。

ご住所 〒 _____

ご協力
あがり
ごいじら

ふりがな、.....

~ご連絡先となる
主宰者(代表者)のお名前

Tel. _____ e-mail _____